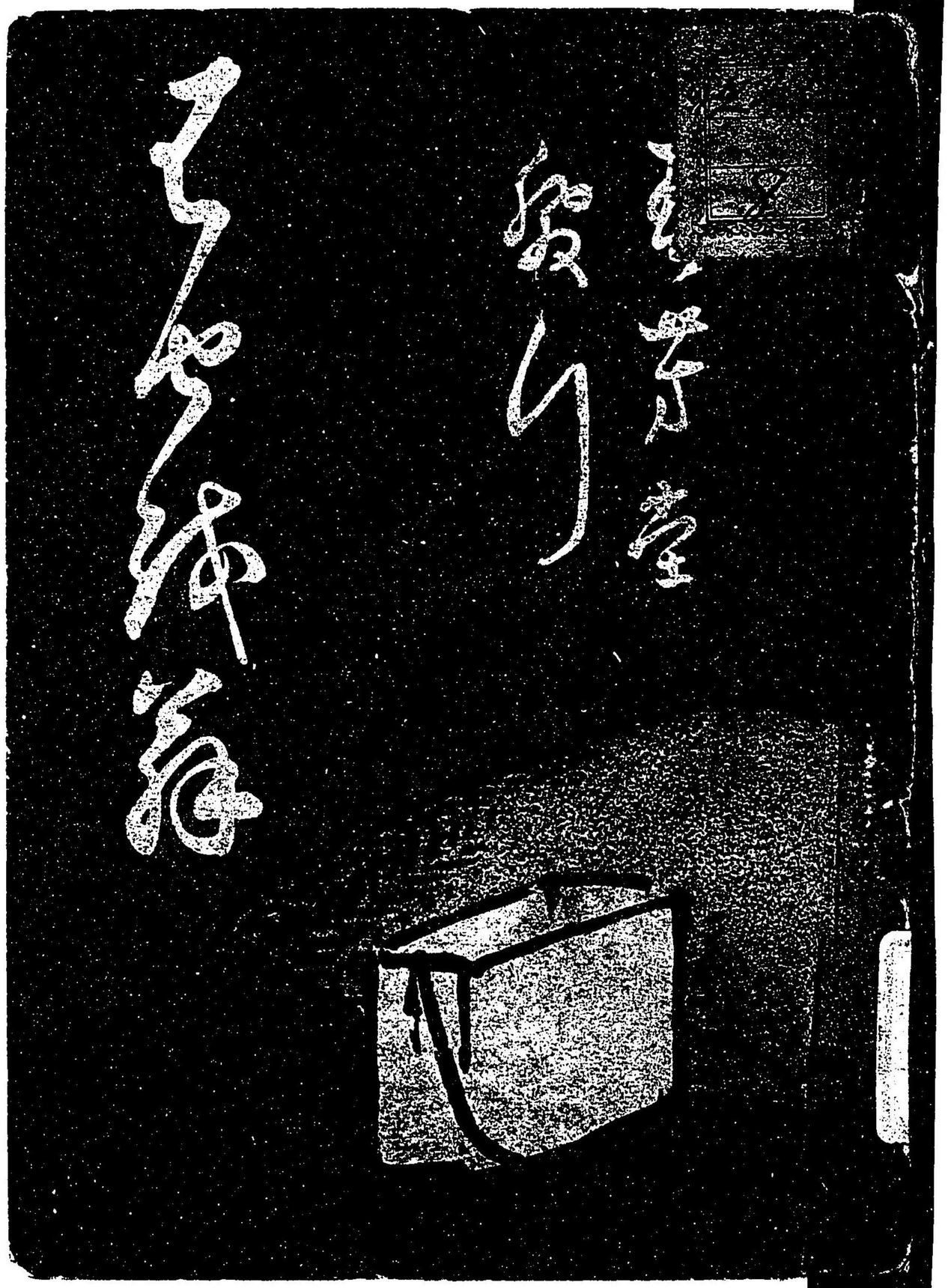


087473−000−5

特64−319

ばしょう翁

九竹園　青芥／編

M35

DBE−0828

特64
319

青芥蓮寫

芭蕉翁略傳

神戸　九竹園青木綱

芭蕉庵桃青翁は伊賀國阿拜郡柘植村の人也平士彌平兵衛宗清の苗裔（其類同郷に姓を松かつ柘植氏松尾氏福地氏等也宗清が屋敷趾今に存す庭に大なる石の手水鉢あり）松尾儀左衛門といふ人に三子有り長を與左衛門（諸書に此人なし半左衛門のみあり伊賀より出たる芭蕉翁正傳の説に依て爰に出す）と云同國上野赤坂町に手跡師範を以家業とす次に半左衛門命清と云藤堂主殿（一説丸兵衛長基）の臣也三は則芭蕉翁也

正保元甲申歲生れ給ひて幼名を松尾半七（一説甚七郎又金作）後改めて忠左衛門宗房と稱す母は豫州宇和島の産桃地氏の女也　芭蕉翁繪詞に宗清領所なれば伊賀國阿拜郡柘植庄に忍住す其子士師三郎家清夫より五代を歷て清正と云人に子數多ありて家をわかつ山川勝島西川松尾北河と名乘代々柘植庄に住めり其末に松尾與左衛門と申せし人初て國の府になる上野の赤阪に住めり是芭蕉翁の父也母は豫州の人なり姓氏さだかならず其子二男四女あり嫡子儀左衛門命清後に半左衛門と云次男半七郎宗房童名金作是翁也后に名を更忠左衛門と云

同愚案蕉翁全傳には蕉翁の俗名藤七郎とあり藤堂家には半七郎とよべりとぞ兄を半左衛門といへるはさるは浪花の遊行寺に野坡か建し碑には甚賀と云り京都の双林寺に支

考が建〜に百地驀と書〜は松尾氏の祖先に百司といひ〜別姓あり其誤りなりと伊賀の國人の傳ふ、

又曰柏原の御門の御ながれ常陸介平正盛と申人の末に右兵衛尉平季宗其子彌平兵衛宗清

東鑑に彌平兵衛尉大系圖に右兵衛尉季宗子宗清武家系圖に左衛門尉季清彌平左衛門宗清參考保元平治物語に彌平兵衛宗清平宗季の子

同愚案東鑑に斯あれど其外の書に宗清の終り〜事詳かならざれば伊賀の芭蕉翁全傳或は伊賀の國人の說に從ふそが上大系圖宗清が母の系譜に柘植と號したるならんたとは〜同時に同國同郡服部の人に服部平内左衛門尉宗長有是世に云伊賀平内左衛門尉也今も拓植鄉には松尾と云家多〜

寛文二年壬寅宗房十九歲にして初て藤堂新七郎良精の臣となる夫は嫡子主計良忠に仕ふ良忠ある時は宗房を呼て月花をもて遊はれ〜となり（良忠俳名蟬吟）此人北村季吟號拾穗軒稱再昌院法印の門に〜て宗房と両吟の卷あり其外反古ども數多あり一とせ大阪の役に戰死せられ〜藤堂新七郎良勝（良精の父にして良忠の祖父なり）遠忌沃莚に

蟬吟

太阪や見ぬ世のゆめの五十年

寛文六丙午（宗房廿三歲）の夏四月良忠不幸にして蚤く世を辭せらる宗房深く傷悼〜て同六月半遺髮の供して高野山報恩院に收む（報恩院の過去帳には松尾忠左衛門殿と記し今こにあり）同月末に下山してひそかに遁世の志ありて類にいとまを乞といへどもゆるしなければ其年秋七月遂に私に主家を辭退して同僚孫太夫といふ者の宅門に一封を殘す

宗房

雲とへだつ友かや雁の生わかれ

と書し短册也宗房が宅地は藤堂新七郎中屋敷城東にあり良精の臣兄半左衛門爰に住す（半左衛門前に長基の臣と有後に良精に仕る歟孰不知）是孫太夫は隣家なり今河合何某住る所宗房の舊宅なり

芭蕉翁繪詞愚案に曰良忠の子息良長末三才なりしを宗房二なく忠を盡し家を繼がーむされば緻扶桑隱逸傳第三卷蕉翁傳に仕府主君而有忠勤云宗房の住し家は上野の玄蕃町と云所にあり

夫より洛に上り在京七年拾穗軒季吟に遊學す

元祿三庚午加州の北枝への消息に筑紫行脚有しよし有其時予廿五才云々と是を以て見れば季吟に遊學中の事なるべし然れども事跡未詳

此頃東山の麓に住し泊船堂桃青と號す一宇陀法師又釣月軒宗茂とも書れしと云

寛文十二壬子（行年二十九歲）九月始て東武に下る小石川水樋に功を殘す

風俗文選云翁嘗世遺切修武小石川の水道四年成速捨功而入深川芭蕉庵出家三十七才云

愚案小石川水樋に功を殘されしといへること分明ならず一說に松村平兵衛と稱〜て幕府の普請方を司り給ひしといへり今猶其家普請方を司て両家侍り位牌印譜反古に存ると云々藤堂家を憚て松尾を更て松村と稱〜給ひし物か又松村家は素よりありて其食客

に侍りしを蕉翁の才能をかりて水樋の功をなしたるもの歟然れども位牌印譜の存するをもて見れは一説實事を得たる物か廿九才にて東都に下り三十一才にして薙髪し給ふ其間僅三年也乍去諸書考る所なし

延寶癸丑（行年三十同二甲寅の年薙髪し給ひ風羅坊又號杖錢子龜々齋と云杉風（俗名鯉屋藤右衛號採茶庵杉山氏時に廿八才）志厚して深川に庵を結びて入まゐらす門人李下芭蕉一株を栽

はせを植て先にくむ荻の二葉かな

繁茂するより世人呼て芭蕉庵と云

同三乙卯（行年三十二同丙辰三十三同五丁巳行年三十四）の春二百韻あり同三吟冬より同六の春までになる江戸三吟と云同六戊午（行年三十五同七巳末行年三十六）六月二十日頃初て伊賀に歸る同秋又東武に下る

同八庚申（行年三十七）初夏門人二十歌仙あり同秋田舍句合常磐屋句合（其角杉風）あり

天和元辛酉（行年三十八同二壬戌行年三十九同三癸亥行年四十

和其角蓼營句（其角號寶晋齋又螺舍或狂而堂本姓寶井氏也榎本氏母方の姓

朝顔に我はめし喰ふをとゝかな

一説に貞享二其角が大酒をいましめ給ふ句といへり

憂正知酒聖賢始覺錢神といへる白居易の句を前にして

花にうき世我酒しるし食くろし

此年の冬深川の草庵急火にかこまれ殆あやふかりしか潮にひたり蓮々かづきて煙りの中にいきのび給ひけり是ぞ玉の緒のはかなきはしめなれは爰に猶如火宅の變を悟り住無所の心を發して其次の年佛頂和尚（江戸臨川寺住職）の奴六祖五平と云（甲州の産にして佛頂和尚に仕へ大悟したるもの歟）ものゝ情にて甲斐に至りかの六祖が家に冬より翌年の夏まで遊ばれしとぞ

自書に云甲斐の國郡内と云所に至る途中の苦吟

夏馬ぼく〳〵我を繪に見る心哉

一説に甲斐の郡内谷村と初雁村とに久敷足をとゞめられし事あり初雁村の等力山萬福寺と云寺に翁の書れし物多くあり又初雁村に杉風か姉ありしといへは深川の庵燒失の後かの姉の許へ杉風より添書など持れて行れしなるべしと云

愚案世に傳ふ臨川寺佛頂和尚に從ひて禪を熟されしと云は此頃の事なるべし、

夫より深川に歸りおはしけれは人々悦びて燒原の舊艸に庵を結びしばしも心とゞまる詠めにもと又はせを一株を栽たり

貞享元甲子深川在一行年四十一

秋八月古郷に趣る千里（俗名油屋喜左衛門）同伴たり此時の道の記を甲子紀行野ざらし紀行或は草枕と云

長月の始古郷に歸り給ふ此時伊賀無名庵を結ぶ後再形庵といふ是なり

同二乙丑（行年四十二ある山家に年を越し給ふ）

春堅田の僧千那（本願寺號蒲萄坊）大津の尙白青亞門に入青亞早世す

三月盡又尾州の蓬島に到り桐葉が家にとゞまる俳諧有（世に熱田三歌仙と云）笠寺に詣たまひ（笠寺は鳴海と宮の間にあり寺號を轉輪山龍福寺と云觀音の靈場笠を召たる姿の木像なりゆゑに笠寺と名づく願ふにも笠を奉る

四月の末深川杉風が別墅に歸りたまふ

同三丙寅（行年四十三深川に在）

春の曉集初懷紙鶴百韻と云春の日集成夏四月常陸廟來の本間道悅號自準亭松江後同州小川に住す同人の門に入て醫を學ひ給ふ（記請文に貞享三年丙寅四月十二日とあり）

冬に至て深川に歸り再び芭蕉庵を作りたまう

素堂両吟和漢の俳諧は貞享丙寅と諸書に出せりしかるに本間氏の門に入て醫を學ひ給ふ即此年を實事とすれば此両吟は或は乙丑又丁卯の年にや侍らんもし四月五月の頃醫業を學び給ひ六月納涼の頃は東武に歸り和漢の俳諧ありて又秋にいたり潮來に下り給ひしゝや詳ならず亦云素堂は號なり表得來雪俗名山口松兵衛一說太郎兵衛博覽の人詩作に長ず總州葛飾に住す両吟の立句も

破風口に日影やよわる夕すゞみ

翁

同四丁卯（行年四十四）深川在庵嵐雪號雪中庵又稱玄峰俗名服部彦兵衛が小袖をまゐらせしたゞやがて着たまひぬ

八月鹿嶋に下りたまふ鹿島紀行曾良俗名河合惣五郎宗波を伴ひ給ひて門より舟にのり行德にわたり舟をあがり八はたを經てかまがいが原を過利根川の邊り布左と云所に着給ひ漁家にやどり夜舟さゝ下して鹿島山の麓根本寺佛頂和尙の許に至られ人をゝて深省を發せしむと云

同月下旬江戸に歸り又十月古郷に趣る卯辰紀行又吉野紀行と云同冬露沾公（號遊園堂岩城内藤侯なり）に逢ひ給ふ

又古郷に歸り給ふ古郷の俳諧世に五庵と稱するものは所謂再形庵無名庵簑蟲庵瓢竹庵東籬庵四麓庵是なりゝか無名庵其初名也

同五戊辰（行年四十五宵の年空の名殘とて舊友來りて酒に與じ元日雜忘れたればとて其はゝ書の句あり）

同年藤堂探丸（新七郎良長と稱す主計良忠の男）成長の後芭蕉翁の宗房たりゝ時の忠節を思ひ別墅の花見と稱して招き初て對面ありしが只いひ出せる駒もなく互に落涙數剋の後

さまゝの事思ひだすさくら哉

春の日はやくふでにくれゆく

探丸

さま〳〵櫻と稱して今猶存すといへり

祖翁の日記自筆にして三行ばかり六月六日大津を出ゑち川に泊七日赤坂に一宿八日岐阜に到る秋芳軒宜白を主とす云々

元祿元戊辰(行年四十五深川在庵)

同二己巳行年(四十六深川にて春を迎へ給ふ)

此春曠野集成奥羽の旅に趣んとし給ひ住る方は人に讓り先杉風か別墅に移り同行曾良此時薙髪して號宗悟三月廿七日の曉舟にて千住に到見送りの人々に別る

松銀象潟を巡り大より北陸道に杖を曳加賀の府まで百三十里風關を越れは越後の地なり越中の境ひ市振の關に到此間九日路暑熱にくるしみて事を記さず云々

北枝加州金澤の產俗姓立花三郎左衛門此外入門あり此所迄送り來る松岡の茶店にて別に臨みて

翁

もの書て扇引さくわかれかな

笑ふて霧にきほひいでばや

北枝

元祿三庚午(行年四十七都近き所にて春を迎へ給ふ)

夏四月初て石山の奥國分山の幻住庵を結びて入り給ふ其記あり

一書に元祿三の一夏は國分山に籠り山を下りて里の童に谷川の石を拾はせ一石に一字づゝの法華經を寫し給ひしと云々

同四辛未(行年四十八瀬頭の無名庵にて春を迎へ給ふ)

同はる支考八號獅子眠又蓮二坊東花坊西花坊尾州犬山の產これが東行を遂給ふ句あり)

卯月十八日去來が落柿舍に到暫く止り給ふ此間の事を記されしを嵯峨日記といふ

三秋を經て深川に歸られければ蕉友門人群來て悅ぶ事限なし

此冬橘町に居給ふ翌年の秋深川の庵を再興して入給ふ栖をかゆる詞あり

元祿五壬申(行年四十九橘町にて越年)

此頃許六(號五老井又稱菊阿佛俗名森川五助彦根侯の臣門入す深川の庵再々興ありて入給ふ柱は杉風枳風が情を削り住居は曾良岱水が物數奇をわびなき名月のよそほひにて芭蕉五株を栽たり

芭蕉を移す詞書あり九月浪花の酒堂深川に來り俳諧あり是を深川集といふ

元祿六癸酉(行年五十藤堂玄虎子の旅館を訪栄根を喫してとは〳〵書ある句あり

同七甲戌行年五十一深川庵在

炭俵集別坐敷集成閏五月十一日洛に趣る四度結び〻深川の庵延寶三貞享三同五元祿五を發出るとは〳〵書ある句あり

伊賀に越て上野丁雪芝山田屋平兵衛翁の從弟也これが庭に松を植るを見給ひて云々(一說に自栽給ひしともいふ

六月〳〵ばらく支考が東山草堂號東花坊に遊び給ひて木曾塚無名庵なりこれに歸らるゝ

時宇治山伏見の里を經てゆかれ〜か此年はいづこにも少しづゝ逗留して桃尻なりと笑ひ給ひ膳所の曲翠か許に到て〜ばし納涼したまひぬ

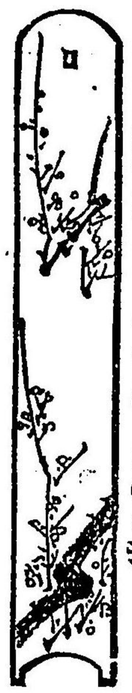
文月の頃伊賀の兄松尾半左衛門の許より消息有て舊里に歸り盆會をいとなみたまふ菩提所は愛湖院と云

九月八日笠置より木津川を乘錢司を過て舟を上り奈良に至猿澤の邊に舍を求めたまひそこを立て闇嶺を超ゑ其より太阪まで駕に乘給ふ難波の少しこなたより駕を下りて雨の孤に身をなして斯る郡の地にては食乞行脚の身をわすれては成がたくと宣ひ吟歩しづかに生玉邊より日暮て浪花に入給ひ〜が人々のもてはや〜にて靜かなる席もなく天王寺住吉の濱など心にまかせて遊ひ給ひ

十三日住吉の市に行給ひ〜が萱のぼどより雨ふり吟行靜ならず夕暮より惡寒に惱み給ひ〜に次の夜はいと快〜とて畦止亭に行たまひ前夜の月の名殘をつくなふ住吉市に立てとはし書の句あり

廿一日廿二日又車庸亭に遊ひ廿六日清水の茶店うかむ瀬と云四郎右衛門が家に遊び給ふ時主のもとめに短册を書てあたゝ給ふ

一說には此時の句は泥足か其便りにありでなれ〜ものゝ云



芭蕉翁終焉記

はなやかなる春はかしら重くまなこ濁りて心うし泉石冷々たる納涼の地はことに濕氣をうけて夜もねられす朝むつけたり秋はたゝかなしひを添る腸をつかむはかり也ともかくもならてや雲のかれ尾花と無常閑閑の折々は訪ふ人も便なく立歸て今年就中老衰なりと歎あへり抑此翁孤獨貧窮にして德業にとめると無量なり二千餘人の門葉遠ひとつに合信する因と緣との不可思議いかにも勘破しかたし天和三年の冬深川の草庵急火にかこまれ潮にひたり笘をかつきて煙のうちに生のひけん是そ玉の緒のはかなき初め也爰に猶如火宅の變を悟り無所住の心を發して其次の年夏の半に甲斐か根にくらして富士雪のみつれなければと夫より三更月下入無我といひけん昔の跡に立歸りれはしけれは人々うれしくて燒原の舊艸に庵をむすひしはしもこゝろとゝまる詠にもとていかふの芭蕉を植たり雨中吟はせき野分して盥に雨を聞夜哉と佗られしに塊閑の友しけくはよひてをのつから

芭蕉翁とよふことになむ成ぬその頃圓覺寺大頼和尚と申か易にくは
くれはしけるによりてうかゝひ侍るに或時翁の本卦のやうみんとて
年月時日を古暦に合せて筮考せられけるに華といふ卦わあたる也是
は一もとの薄の風に吹れ雨にしはれてうき事の數々しけく成ぬれと
も命つれなくからうして世にあるさまに譬へたりされはあつまると
よみてその身は潜かならんとそれともかなたこなたより事つとひて
心さしをやゝんする事なしとかや信に聖典の瑞を感しけるさのこと
く草庵に入來る人々の道をしたへるあまりとにもかくにも慰むれは
所得たるかな橋あり舟あり林あり塔あり花の雲かねは上野か淺
草かと眼前の奇景も捨かたくおの〳〵かせめておもふもむつかしく
侍れと古郷に聊忍はるゝことありとて貞享初のとしの秋知利をとも
なひ大和路やよし野の奥も心のこさを露とく〳〵こゝろみにうき世
すゝかはや是より人の見ふれたる茶の羽織ひの木笠になんいかめし
き音やあられと風狂してこなたかなたのしるへ多く鄙の長路をいた
はる人々名をは句を忍と安からを聞そしかは隱れかねたる身を竹齋
に似たるかあ〻風の吟行に猶々德化して正風の師と仰き侍る也近在
隣郷より馬をはせて來りむかふるもせんかたなし心をのゝめてと思
ふ一日もなかりけれは心氣いつしかに襄減して病む雁のかた田にれ
りて旅寢かなとくるしみけん其年より大津膳所の人々いたはり深く
幻住庵(猿蓑に記あり)義仲寺もく所至る處の風景を心の物にして遊
へること年あり元來混本寺佛頂和尚に嗣法してひとり開禪の法師と
いはれ一氣鐵鑄生いきはひなりけれとも老身くつはるゝまゝに句毎
のからひたる姿まても自然に山家集の骨髓を得られたる有難くやさ
れはこそ此道の杜子美也ともてはやして貧交人に厚く喫茶の會盟に
於ては宗鑑か洒落も敎のひとかたに成て自由躰放狂躰世擧つて口う
つせしも現力也凡篤實のちなみ風雅の妙花に勾ひ月にかゝやき柳は
流れ雪にひるかへる須磨明石の夜泊淡路島の明はの杖を引はてしも
なくきさかたに能因木曾路に兼好二見に西行高野に寂蓮趣路の緑は

宗祇宗長白川に兼載の草庵いつれも〳〵故人なから芭蕉翁について
まはろしにみえいさや〳〵とさろはれけん行衛の空もたのもしくや
(奥の細道といふ記あり)十餘年からうち杖と笠とをはなさを十日も止
所にては又こそ我胸中を道祖神のさはかし給ふ也と語られしなり住
つかぬ旅の心や置巨燵是は慈鎮和尚のたひの世にまた旅寢してくさ
枕もめの中にもめを見るかなとよませたまひしに思ひ合せて侍る
也遊子か一生を旅にくらしてはつと聞得し生涯をかろんし四こひむ
すひつる深川の庵を又立出るとてうくひすや笋やふに老をなく人も
泣るゝわかれなりしか心待するかたゝ〳〵とにかくかしがましとてふ
たゝひ伊賀の古郷に庵をかまへ(三日月の記なり)爰にてしはしの閑
素とうかかひたまふに心あらん人にみせはやと津の國なる人にまね
かれて爰にも冬籠する便ありとて思ひ立たまふも道祖神のすゝめ成
へし九月廿五日膳所の曲翠子よりいたはり迎へられし返事に此道を
行人なしに秋の昏と聞えけるも終のしはりをしられたるなり伊賀山
のあらし紙帳にしめり有ふれし菌の塊積にさはるなりと覺えしかと
苦しけなれは例の藥といふより水あたりして長月晦の夜より床にた
ふれ泄痢度しけくて物いふ力もなく手足氷りぬれはあはやとてあつ
まる人々の中にも去來京より馳くるに膳所より正秀大津より木節乙
州丈艸田の李由つき添て支考惟然と共にかゝる歎きをつふやき侍
るもとよりも心神散乱なかりけれは不淨とはゝかりて人々近くも招
かれす折々詞のつかへ侍りけるたゝ壁をへたてゝ命運を祈る聲の耳
に入けるにや心弱きもめたるはとて

旅に病てもめは枯野をかけ廻る

また枯野を廻るもめ心ともせはやとまふされしか是つゝ妄執なから
風雅の上に死ん身の道を切に思ふなりと悔まれし八日の夜の吟なり
各はかなくおはへて

賀會祈禱の句

落つきやから手水して神集め　木節

木からしの空見直やつるの聲　去來
足かろに竹の林やみそさゝい　惟然
初雪にやかて手引ん佐太の宮　正秀
神の留守たのみかやま川の風　之道
居上ていさみつきけり鷹の貌　伽香
起さるゝ聲もうれしき湯婆かな　支考
水仙や使につれてとこはなれ　呑舟
峠こす鴨のさなりや諸きはひ　丈艸
日にまして見ます貌也霜の菊　乙州

是そ生前の笑納めなり木節か藥を死迄もとこのみ申されけるも實也人々にかゝる汚れを耻たまへは坐臥のたすけとなるもの呑舟と舍羅也これは之道かまつしくて有なから功に心さしをはこへるにめてゝ彼か門人ならは他ならすとてめして介抱の使としたまふそもかれらも緣にふれて師につかふまつるとは悅ひなからも今はのきはのたすけとなれは心よはきもことはりにや各かはからひに麻の衣の垢つきたるを恨みてよきゝぬに脫かはし夜の衣の薄けれはとて錦繡のめてたきをとゝのへたるそ門葉のものともか面目なり九日十日はことにくるしけ成に其角和泉の府淡の輪といふわたりへまいりたるたより乙州に尋られけるになつかしと思ひ出られたるにこそとてやかて文したゝめてむかひ參りし道たかひぬ予は岩翁龜翁ひとつ舟にふけねの浦心よく詠めて堺にとまり十一日の夕へ大坂に着て何心なくれきなの行衛れはつかなくとばかりにたつねければかくなやみれはすといふに胸さはきとくかけつけて病床にうかゝひよりいはんかたなきおもひをのへ力なき聲の詞をかはしたり是年ころの深志に通して住吉の神の引立たまふにやと歡喜すわかのうらにても祈つる事はかく有へしとも思ひよらす蟻通の明神の物とかめなきも有がたくおぼえ侍るにいとゝ泪せきあけてうつくまり居るを去來支考かかたいらにまねくもへに退いて妄眛の心をやすめけり膝をもるめて病顏をみ

るにいよ〳〵たのみなくて知死期も定めなくしくるゝに

吹井より鶴をまねかん時雨かな　其角

と祈誓してなくさめ申けり先たのむ椎木のもありと聞えし幻住庵はうき世に遠し木曾殿と塚をならへてと有したはふれも後のかたり句に成ぬるろ其きさらきの望月の頃と願へゝにたかはゝ常にはかなき句とものあるを前表とおもへは今さらに臨終の聞えもなしとしられ侍り露しるしなき薬をあたゝむるに伽のものとも寢もやらて灰書に

うつくまる薬のもとの寒さかな　丈艸

病中のあまりすゝるやふゆ籠　去來

引張てふとんそ寒きわらひ聲　惟然

しかられて次の間へ出る寒かな　支考

れもひ寄る夜伽もしたし冬籠　正秀

閨とりて菜めし焚する夜伽かな　木節

皆子なりみのむし寒く啼盡す　乙州

十二日の申の刻はかりに死顔うるはしく睡れるゝ期として物打かけ夜ひろかに長柩に入てあき人の用意のやうにこしらへ川舟にかきのせ去來乙州丈艸支考惟然正秀木節呑舟壽貞の子次郎兵衛予とも十人笘もるしつく袖寒き旅ねこそあれたひ寢ころあれとためしなき寄縁をつふやき坐禪稱名獨〳〵に年ころ日ころのたのもしき詞むつましき教をかたみにして俳諧の光をうしなひつるに思ひしのへる人の名のみ慕へる昔かたりを今さらにしつ東南西北に招かれてつねの栖を定めさる身のもしや奥の松島越の白山しらぬはてしにてかくもあらは聞て驚くはかりの歎きならんに一夜もそひてかはねの風をいとふこと本意なり此期にあはぬ門人の思ひいくはくそやと島にさめかねをかそえて伏見につくふしみより義仲寺にうつして葬禮義信をつくし京大阪大津膳所の連衆披官從者迄も此翁の情をしたへるにころまねかさるに馳來るもの三百余人也淨衣その外智月と乙州か妻ぬひたてゝ着せまいらせ則義仲寺の直愚上人をみちひきにて門前の少引入

たる所にかたのごとく木曾殿の右にならへて土かひおさめたりをのつからふりける柳もありかねての墓のちきりならんとそのまゝに卵塔をまねひあら垣をしめ冬枯のはせをを植て名のかたみとす常に風景をこのめる癖ありけにも所はなから山田上山をかまへてさゝ波も寺前によせ漕出る舟も觀念の跡をのこし樵路の鹿田家の雁遺骨を湖上の月にてらすことかりそめならぬ翁なり人々七日の程こもりてかくまてに追善の興行幸にあへるは予なりけりと人々のなけきを合感して愚かに終焉の記を殘し侍るなり程もはるけき風のつてに我翁をしのはん輩は是をもて回向のたよりとすべし

晋子書

於粟津義仲寺牌位下

僕野巢いぬる天保十年甲戌筑紫遊歴の折から高良山玉垂宮に幣奉りかたへに祠堂ありこは寛政辛亥年神祇伯從二位資延王の御館に參りて桃青靈神の號を願ひ奉りしにいとかしこくも御文書を給はりて創建せる處也去を文政丙子年の野分の爲に敗壞せしを志同うする輩と倶に補治を加へ再ひ道光を輝せるよし標石に記しぬ又傍に碑有其銘に曰

歌は出雲八重垣連歌は甲斐の酒折の社俳諧は築紫高良山桃青靈神の左して永く風流の道を守護し給ふ

今よりは幣ともならん枯尾花　重厚

部關牛書

芭蕉翁傳

翁者伊賀州上野城人稱二松尾甚七郎宗房一爲二藤堂侯臣一弱冠辞レ祿入レ京就二北村季吟一學二誹諧一誹諧亦和歌連歌之流其名始載二在古今集一矣薙髮自命曰二桃青一取二義於馬祖梅子未レ熟之語一蓋謙也其代レ梅以レ桃者豫州有二榮族桃地氏一翁爲二其蘖一云業成而往々於武都深川庵栽二芭蕉一以爲レ號其門日開弟子月進嘗讀二漢太史公央記滑稽傳一註曰滑稽猶俳諧也於レ是乎悟二誹諧者誹諧誤一乃改レ誹作レ俳先正二其名一而後盡棄レ

舊學レ新奉ニ古之教ニ以繼ニ千載微言之緒ニ則德立道明談笑諷諫尤益ニ於金ニ可レ謂ニ東方朔郭舍人之徒ニ矣但其意既變而其調未與ニ之化ニ一日訪ニ其友佛頂和尚ニ不レ遇繞レ庭偶見ニ蛙之向池跳ニ卒然發ニ妙句ニ示來其調與ニ其意ニ合曲高飛陽春白雪海內無ニ和者ニ群流反ニ一嘲之ニ則弟子亦皆失レ望稍々退散雖レ然翁不ニ顧之ニ曰右文之世上自ニ吾神國大奉常ニ下至儒佛老莊諸子百家及小藝末枝之師ニ苟有ニ其德ニ者其道豈無ニ行之時ニ哉而遲速天之所レ命予雖ニ無德ニ亦有ニ以待ニ則今也爲ニ獨夫ニ不レ憾焉去而東結ニ廬於奥之細路ニ已而復西歸定ニ居于江州石山之下ニ所レ謂幻住庵是也當ニ此時ニ其道果行諸侯尚有レ慕ニ其德ニ以入レ門者甲而況大丈夫士乎況於ニ庶人ニ乎遠近競集其徒如雲其首則其角嵐雪丈草許六杉風桃隣半殘濁子去來支考其佗鄙客巴人輩紛々似レ雨眞天下之大宗師矣哉後遊ニ浪華ニ罹レ病而歿焉壽五十三實元祿七年甲戌冬十月十二日也

千里庵白弧拜撰

野梅庵蕉像之記

芭蕉庵桃青は伊賀國阿部郡柘植村之產也彌半兵衞宗淸が苗裔にて松尾儀左衞門三男三八郎則翁也正保甲申年誕生初名半七又圓藏甚四郎名は宗房後改桃青寛文二壬寅年十九初て伊賀上野城主藤堂新七郎良晴に仕良晴卒後嫡子良忠に仕良忠俳名蟬吟北村季吟門人也翁を愛してともに月花を翫ひこまふ故良忠宗房両吟之卷ありといふ良忠祖父良勝は大阪敗に戰死す其遠忌法莚に大阪や見ぬ世の夢の五十年蟬吟そりたかき霜の及や橋の上寛文六丙午年四月良忠早世を翁深くかなしみ同年六月遺髮を奉して高野山に登り報恩院に納め下旬歸國を報恩院の過去帳には松尾忠左衞門と之有是より翁しきりに遁世の志あり暇を願へとも許しなけれは秋七月同僚隣家孫太夫か門に一ッの包みを殘して辞すそのつゝみの中に短冊あり宗房二十三歳

雲とへたつ友かや雁の活わかれ夫より京都に登りて吟叟の門に遊學する事七年東山に住治船堂と號を寛文十二壬子年二十九歳にて九月

東都杉風方へ來る杉風は杉山氏なり
御入國より公用之魚屋なり小田原町に住後小石川水道修成傭夫となりて功終る頃薙髪して風羅坊素宜と改時に杉風よりの句に
衣更着は十徳を着て申なれ　翁三十一歳夫より加賀浪花東都に遊學して延寶四丙辰年三十三歳此春三百韻の俳諧あり六月伊賀に至り秋東都に歸り本所中の卿完林院に住禪學に入又鹿島混本寺に至り佛頂老師に禪意を悟書法を森川許六に得たり何の年にや有けん石山のたくに客居して幽閑をたのしむ貞享四年鹿島の吟行あり同五年杜國を携て大和に遊ふ元祿二年曾良を卒して陸奥に遊行す同七年の秋伊賀に在しか浪花より招く人々あれは奈良の重陽をかけてもかんと支考惟然を伴ひ風遊するの日痢と病て大阪御堂前花屋仁右衛門が後園に伏病中の吟　旅に病て夢は枯野をかけまはる
是風吟の終なりつねに七日をもきて沒す年五十一嗚呼悲しいかな此叟一たひ江戸に馳擧して初て自然の妙をひらき終に俳道と以て人を教導せられし事筆紙につくしかたし

干時弘化四丁未仲秋の日於旅窓　　吳風敬寫

十月廿五日共桃隣出武江而暨義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつの冬か木からしのうしろむさろめ葛のはのおもてみし秋より春にわたり杖にさめ笠に眼り小蓑に病つねの浮世をなにはになして枯にあそふと聞え給ひし一句を今そらのうつゝになしぬ其角はさる契ありてや生前のこいめ後のことまてとりをさめつかへけり遠き境の人はいまたしり及さすや江都に心さしをつくせるたいかれところ所に席をかまへて追善興行のくさ〳〵袖に袂にひろひかさねて往くに歩みをわすれ富士も見を大井もしらぬ寒ろらかけて霜月七日のもふつくよのはとに義仲寺の冢上にひさまつく空華散水月うちこはす時心鏡一塵をひかされは萬象よくうつる此師この道にねねてみつから

を利し他を利して終に其神不竭今も見たまへいまも聞給へとて

この下にかくねむるらん雪佛　雪嵐拜

義仲寺に參り亡師の塚のもとに舊來をかたらんとす之も隱逸のこゝろざしにつかへ一たひは笈のたそけともなりぬ今さらに遠里をへたてゝかく所の苔の下にむなしき名のみ聞えけるを

月雪にかりのいほりや七ところ　桃隣

深草のおきな宗祇居士を讃していはすや友ニ風月ニ家ニ旅泊ニと芭蕉翁のれもむきに似たり

旅のひひつねに宗祇のしくれ哉　素堂

はせを翁みまかりぬる跡をたにとてたひたつ人にことつて侍ける

秋風にたへてしはしは殘りしも

しものはせをのおはれ世のなか　安道

芭蕉翁略傳終

芭蕉翁發句類題集

春之部

正月　正月も美濃と近江やうるふ月

元日　元日やおもへはさひし秋の暮

元日は田毎の日ころ戀しけれ

歲旦　年々や猿に着せたるさるの面

於春（はるには）大哉春云々（おほいなるかはるにはるとは）

立春　春たつや新年ふるき米五升

春たちてまた九日の野山かな

今朝春　庭訓の往來誰文庫より今朝春

嵐雪か贈りたる正月小袖を着てれは

誰やらか姿に似たりけさの春

舊友と酒興して元日の晝迄臥あけぼの見はつして

花春　二日にもぬかりはせしな花の春

京近き所に年をとりて

誰人か薦着てゐますはなの春

千代春　伊勢か賣家にも來たり千代春

君か春　かひたんもつくはらせ鳧君か春

宿春　發句なり芭蕉桃青やとのはる

若夷　年や人にとらせていつも若夷

我年を棚へあけてやわか夷子

高臺に登りて見れはの御製の難有は今も猶

庭竈　叡慮にて賑ふ民やにはかまど

庵にありて

松飾　いく霜にこゝろはせをの松飾

元朝感あり

齒朶　餅を夢に折詰齒朶の草まくら

山家に春を迎

誰か聟ろしたに餅負ふ丑の年

蓬萊　蓬萊にきかはや伊勢のはつ便

惠方　惠方から曳や今年もうしの玉

湖頭の無名庵に年を迎時三日口を閉て

筆始　大津繪の筆のはしめはなに佛

子の日　子の日しに都へもかん友も哉

よし野西行庵

凍解　凍とけて筆に汲はを清水かな

氷解　勢ひありこはり消ては瀧津魚

季吟勸進卷頭

霞　和歌の跡問ふや出雲の八重霞

奈良にて

春なれや名もなき山のあさ霞

大日枝やしを引すてしひと霞

陽炎　枯芝やまたかけろふの一二寸

伊賀新大佛寺

丈六にかけろふ高し石のうへ

嵯山旅宿

陽炎のわか肩にたつ紙衣かな

かけろふや柴胡の原の薄曇り

野州室の八島にて

糸遊　いとゆふに結ひつきたる煙哉

入かゝる日もいと遊の名殘哉

暮遲　くれ遲き四谷過けり紙草履

春風　春風やきせるくわへて船頭殿

奈良に出て

春風や人聲うつるみかさやま

笠寺奉納

春雨　笠寺やもらぬいはやも春の雨

はるさめの木下に傳ふ雫かな

春雨やよもさをのはす草の道

赤坂庵にて

不性さやかき起されし春の雨
はるさめや蓑吹かへすかは柳
春雨やはちの巣つたふ屋根漏
故郷みのうらか園中に三草の種を盛て
春雨や二葉にもへる茄子たね

若菜

蒟蒻にけふは賣勝わか菜かな

薺

四方に打薺もしとろもとろ哉
古畑になつなつみ行く男とも
一とせに一度つまるゝ薺かな

石川北鯤生の舍弟山店子我つれ〳〵慰んとて芹の食養させて深川まて持來る是に青泥坊底の芹にやわらんと其代の佗もいまさらに覺ゆ

芹

我ための鶴哺みのこすせりの食
おしまんや墨子せり燒を見ても猶

土筆

まふくたか袴よそふかつく〳〵し
圃角か扇に讃を望むに

若草

前髪もまたわか草のにはひ哉
木曾の情雪や生へぬく春の草

菩提山

野老掘

山寺の悲しさ告よとろゝはり
ちさ摘て貧なる女はたによる

首

雪間よりうす紫の芽獨活かな

獨活

箸の先に花さかせけり櫻海苔

海苔

老慵

蠣よりはのりをは老の實もせて
れとろひや齒に喰當し海苔の石

淺草千里か許にて

海苔汁の手際見せけり淺黄椀

梅

この梅に牛も初音と聞つゝし
古さとの梅や難波の二年こし
梅か香やしら〻落くは京太郎
盛りなる梅にまて引風もかな

竹内一枝軒にて

世に匂へ梅花一枝みそさゝい

某の草庵を尋ね侍りけるに餘所に出けるよしにて年老たるとのこの
ひとり留主を守り居けるに垣穂の梅盛なりけるを是なん主しと云け
れは隣の梅にて候と申すにいよ〻興をうしなひて歸るとて

留主に來て梅さへよその垣根哉

伊賀のある方にて

旅鳥ふる巢はうめに成にけり

訪山隱

梅白しきのふや鶴を盗まれし
梅咲てよろこふ鳥の景色かな
うめ折て椿にまよふたもと哉
山里は万歳おそしうめの花

奈良にて

阿古久曾のこゝろは不知梅花

卓袋亭月待

月待やうめかたけゆく小山伏

山　家

手涕かむ音さへうめの盛り哉

伊賀の山家にうにといふものあり土底より堀出して薪とす石にもあらず木にもあらす黑色にてあしき香ありそのかみ高梨野なり是を考て日本草に石炭と云物ありいかに申傳へて此國にのみ燒ならはしけんいと珍し

香にはへうに堀岡の梅の花

一とせ都の空に旅寐せし頃にて行脚の僧知人になり侍るにこの春みちのくに見に行とて我草庵を訪ければ

又もとへ藪の中なるうめの花

子良館のうしろに梅ありといへば

御子良子の一もとゆかし梅花

網代民部か息に逢ふて

梅の木に猶寄生木やうめの花

里の子ようめ折のこせ牛の鞭

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北のうめ

春もやゝけしき調ふ月とうめ

人も見ぬ春や鏡のうらのうめ

去來か許へなき人の事なと云遣ととて

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

何某新八去年の二月身まかりしを一周忌のはとに父梅

丸子の方へ申つかはしける

梅か香に昔の一字あはれなり

梅香にのつと旭の出る山路哉

あち東風や面々さはき柳かみ

餅雪をしら糸となすやなき哉

在原寺にて

鶯を魂にねるかうはやなき

猿雖に對して

もろ〳〵のこゝろ柳に任へし

古川にこひて芽を張る柳かな

吹たひに蝶の居なをる柳かな

贈杜國

柳

笠の緒に柳わかねる旅出可南

腫ものに柳のさはるしなへ哉

春雨いとしもかに降てやかて晴たる頃近きあたりなる柳見に行ける

に春光きよらかなる中に滿りいまた小止なければ

八九間そらて雨ふるやなき哉

傘にれしわけ見たる家内喜哉

うくひもの笠落したる椿かな

葉にそむく椿や花の餘所こゝろ

落さまに水てはしけりはな椿

逃水やつはきなかるゝ竹の奥

春の駒　しはしりの尻も居らす春の駒

猫の戀　猫の妻竈の崩れより通ひけり

まとふとな犬ふみ付て猫の戀

田家

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

ねこの戀やむ時閨のおぼろ月

白魚

藻すたく白魚や捕は消ぬへき

曙やしら魚しろきこと一寸

常陸下向に江戸を出る時送の人に

鮎の子の白うをおくる別れ哉

蜆子賛

しら魚や黑き目をかく法の網

膳所へ行く人に對して

瀨祭魚　瀨のまつり見て來よ瀨田の奥

相國寺にて

鶯

うくひすに感ある竹の林かな

鶯や柳のうしろやふのまへ

黄鳥やもちに糞する椽のさき

雲雀

永き日を囀り足らぬ雲雀かな

原中やものにもつかす啼雲雀

臍峠

ひはりより上に休ふたうけ哉

杉風夢想

二月　さゝけたり二月中旬はつ茄子

二月十七日神路山を出るとて

裸にてまたきたかきの嵐かな

朧　月　花の顔にはれうたてしや朧月

名所は體のうち

貝寄風　貝よする風の手品や和歌の浦

二月吉日とて是橋か剃髪して醫門に入を賀す

初　午　初午に狐のそりしあたまかな

彼　岸　けふひかん菩提の種を蒔日哉

伊勢にて

涅槃會　神垣やおもひもかけす涅槃像

二月堂

水　取　水とりやこはりの僧の沓の音

待　花　まつ花や藤三郎かよしのやま

初　花　初はなにいのち七十五年迄と

伊賀上野藥師寺初會

初　櫻　はつ櫻折しもけふはよき日也

咲みたす桃の中より初さくら

顔に似ぬ發句も出よ初さくら

紅　梅　紅梅や見ぬ戀つくる玉すたれ

接　穂　捨ものに梨のすきはや山屋數

種　蒔　この種と思ひこなさし唐辛子

種　芋　たね芋や花のさかりに賣歩行

薺　花　よく見れはなつな花咲垣根哉

此筋に望まれたる茅舍の畫讃

葎さへわか葉やさしや破れ家

逢龍尙舍

荻若葉　もの〻名を先問ふ荻の若葉哉

李下はせを贈る

芭蕉うゑて先にくむ荻の嫩哉

燕　煤はりて埃焚く家に鳴つはめ

楠部

盃に泥なれとしそむらつはめ

名所は體のうち

雉子　姨石に啼かはしたるきゝす哉

高野

父母のしきりに戀し雉子の聲

ひはり鳴中の拍子や雉子の聲

蛇喰ふと聞はねろろし雉子聲

遁世のとき

雁　別　雲とへたつ友かや雁の生別れ

雀　子　すゝめ子と聲鳴かはす鼠の巣

隣庵の僧宗波旅に赴れけるを

鳥　巣　ふる巣たゝ哀なるへき隣か那

貞享三丙寅の春深川庵に在りて春雨の雫もいまた乾さるに暮かゝりたる折から妨來る人もなくてと前書あり

蛙　古池やかはつとひこむ水の音

蛙子は目すり鱠をなく音かな

莊子の畫讃

蝶　唐土のはいかい問ん飛ふ胡蝶

ある人筆を製して贈りけるに誠に好しけれは

君やてふれや莊子のもめ心
もの好やにはぬ草に留る蝶
蝶のとふはかり野中の日影哉

作木亭

てふの羽の幾度越る塀の屋根
起よ〳〵わか友にせん寢胡蝶

田螺

袖汚すらん田螺の蜑の隙を波
芳野を下る時

飯貝や雨にとまりて田螺さく

雛

内裡雛人形天皇の御宇とかや

春けき旅の空思ひやるにもいさゝかも心にさはらん物むつかしけれ
は日頃住ける庵と相知れる人に讓りて出ぬ此人なん妻を具しむすめ

孫なと持る人なりけれは

草の戸も住かはる代そ雛の家

重三

潮干

青柳の泥にしたたる汐干かな

色見草

百景や杉の木の間に色見草

草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり

両の手に桃とさくらや草の餅

峯入

みね入や一里れくるゝ小山伏

伏見西岸寺

我衣に伏見のものゝ雫くせよ

煩悩はもちこそ喰はれ桃の花

尚白と浪花に下る

たゝ一夜もゝに宿かる木幡哉

古寺の桃に米ふひをとこかな

舟あしもやすむ時あり濱の桃

逢故人

命ふたつ中に活たるさくら哉

櫻

探丸子別墅

さま〳〵の事れもひ出す櫻哉

乾坤無住

よし野にて櫻見せうそ檜かさ

聲よくは瓢はんものを櫻ちる

山家

鶴の巣に嵐の外のさくらかな

扇にて酒くむかけや散さくら

木のもとは汁も鱠もさくら哉

萬乎別墅

年々やさくらを肥すはなの塵

春の夜は櫻に明てしまひけり

雨ふりけれは

山櫻　草履とり折て歸らん山さくら

初瀬にて人々花見ける時

うかれける人やはつせの山櫻

芳野にて

山さくら瓦ふくものまつ二ッ

歌よみの先達多しやまさくら

上醍醐

留守といふ小僧なぶらん山櫻

句空への文に

うらやまし浮世の北のやま櫻

八重櫻　奈良七重七堂伽藍八重さくら

絲櫻　いとさくらこや歸るさの足縫

半日の雨より長しいとさくら

姥櫻　姥さくら咲や老後のたもひ出

犬櫻　吹風に尾はそく成るやいぬ櫻

櫻狩　櫻かり氣持や日々に五里六里

似合しや豆の粉めしに櫻かり

花見　艶なる奴花見るやたれかさま

てをちよくに持てふ來るや花見酒

京は九万九千群集の花見かな

菜畑に花見顔なるすゝめかな

鵲も巣も見らるゝ花の葉越哉

景清もはな見の座には七兵衛

路通か陸奥に赴く時

草枕まことの花見しても來よ

玄虎子か深川の旅舍を訪

花見にとさゝ舟れそし柳はら

上野の花見にまかり侍りしに人々幕をうちさはき物の音小うたの聲

さま〳〵なりけるかたはらの松のかけをたのみて

四つ五器のそろはぬ花見心哉

昆沙門堂の花盛四天王榮華も是にはいかて增るへきうへなる黑谷下

河原ひかし遍照僧正か浮世をいとひし花頂山わしのみやまの花の色
枯にし鶴の林までおもひしられてあはれなり

観音のいちか見やりつ花の雲
蝶鳥のうはつきたつや花の雲

草庵

花のくも鐘は上野か淺くさか

僧李吟餞別

鶴の毛のくろき衣やはなの雲

花の雪　先知や宜竹か尺八に花のゆき

上野の奥

花　花に酔り羽をり着て刀さす女

憂方知酒聖貧始覺錢神

花に浮世わか酒しろく食黒し
うち山や外様しらもの花盛り
蝙蝠も出ようきよのはなに鳥
紅毛も花に來にけり馬にくら

花のもとにて發句望れ侍りて

花に明ぬなけきや我かうた袋
はる風に吹出し笑ふ花もかな
さかりしや花に心うき法師ぬめり妻
世にさかる花にも念佛申けり

湖水眺望

辛崎の松は花よりれはろにて

訪山隱

櫃の木の花にかまはぬ姿かな
花咲て七日鶴見るふもとかな

物皆自得

花に遊ぶ虻なくらひそとも雀

あすは檜とかや谷の老木のいへることありきのふは夢こそきて翌はいまた來らぬ只生前一樽のたのしひの外にあすは〳〵といひくらして終に賢者の譏をうけぬ

さひしさや花の邊のあすならう

瓢竹庵に膝をいれて旅のおもひいと安かりけれは

花を宿にはしめ終りや廿日程

同庵より旅立けるに

此はとを花に禮いふ別れかな

古沓やはなの旅出の拾ひはき

龍門二句

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

よし野

花さかり山は日ころの朝ぼらけ
しはらくは花の上なる月夜かな

草尾村にて

花の蔭謠に似たるたひ寢かな

大和に行脚して葛城の麓を過るによその花は盛りにて峯〳〵はかすみわたりたる曙のけしきいとゝ艶なるにかの神のみかたち惡しきと人の口さかなく云傳へ侍れは

猶見たし花にあけゆく神の顔　五六

貞享五年きさらぎの末伊勢に詣つ我御白洲の土を踏こと既に五たひに及ひ侍りぬひとつ〳〵としのくははれるにしたがひてかけまくもかしこきおほん光りも思ひまされる心地してかの西行の涙の跡をしたひ増賀のまとを悲しひて内外の御前にぬかつきなから袂しほるはかりになんはへる

何の木の花とは知らす匂ひ哉
鐘きへて花の香は撞く夕邊哉

路草亭にて

紙衣のぬるとも折ん雨のはな

伊賀の國花垣庄はそのかみ奈良の八重櫻の料に付られけると云傳へ侍りれは

一里はみなはな守り子孫かや

藤堂喬木亭に遊ふ

土手の松はなや木深き殿造り

洒落堂に遊ひて其記を書給ひて

四方より花吹き入れて鴉の湖

あらし山

花の山二丁のほれは大悲かく

支考か蹠奥へ下るを送る

此こゝろ推せよ花に五器一具

尾張の門人より淡酒一樽木曾の獨活茶一種を贈りけるを人々にすすむるとて

飲明てはな生にせむ二升たる　五十七

捨はて丶身はなきものと思へとも雪の降る日は
寒くこそあれ花の咲日は浮れこそすれ

示門人

子に飽くと申人には花もなし

蕭山か需にて探雪の書きし琴の讃

散る花や鳥もれとろく琴の塵

露沾公にて

西行の庵もあらんはなのみち

櫻をはなと寢處にせぬそ花にねる春の鳥の心よ

花に寢ぬこれも類ひか鼠の巣

孤石かみちのくに行を送る

むく起に隣の花のにはひかな

茶摘　摘けんや茶を煮からしの秋とも知らて

茶店

躑躅　つ丶し活て其蔭に干饂さく女

畫讃

裾山や虹はくあとの夕つ丶し

大和行脚の時丹波市とかいふ所にて日の暮か丶りけるに藤の覺束なく咲こはれけるを

藤　草臥て宿かるころや藤のはな

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵をたつねて

留守に來て柵さかしする藤花

山吹　山吹の霜菜の花のかこち顔なるや

西河

はろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

畫讃

山吹や宇治の焙爐のにはふ時

やまふきや笠にさすへき枝の振

花は賤の目にも見えけり鬼劉

劉

大津に出んと山路を越

山路來て何やらゆかしはな薗

悼呂丸

當歸よりあはれは塚の薗くさ

田家に春の暮を佗

春暮　入相の鐘もきこえす春のくれ

鐘つかぬ里は何をかはなの暮

行春　行春に和歌の浦にて追付たり

留別

行春や鳥なく魚の目はなみた

望湖水惜春

ゆく春を近江の人とをしみける

春雜　梅柳さてわか衆かなをんなかな

乙州東武に行餞別

うめ若菜鞠子の宿のとゝ汁

かそえこぬ屋敷〳〵のうめ柳

初瀨にて

春の夜や籠人もかし堂のすみ

伊勢に越して二見の圖を拜して

うたかふな潮のはなも浦の春

考證

まちかねて隣の梅を折にゆく

上野の興

花に醉り羽織きて語れさす女

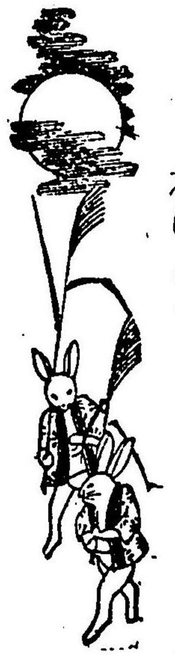
坦堂和尚を悼

地にたふれ根により花の別かな

鄙歌自得

れもふことふたつのけたるその跡は

花のみやこもねなかなりけり



夏之部

四月　思ひ出す木曾や四月の櫻かり

更衣　ひとつ脱てうしろに負ぬ更衣

短夜　みしかよや驛路の鈴の耳に付

灌佛　灌佛や皺手あはする珠數の音

奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

尾張より東武に下る時

牡丹　牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘哉

桃隣新宅自畫自讃

寒からぬつゆや牡丹の花の蜜

杜若　爰か三河むらさき麥の燕子花

大阪にて

杜若かたるも旅のひとつかな

山崎宗鑑屋敷にて近衛殿の宗鑑か麥を見れは杜若と遊はしけるを思ひ出て心の中に云

有かたきすかた拜なん燕子花

鳴海知足亭

杜若われに發句のおもひあり

瞿粟　白けしや時雨の花のつ咲らん

贈杜國

白けしに羽ひく蝶のかたみかな

須磨

海士の顔まつ見らるゝや瞿粟の花

名所は體のうち

麥　秋や須磨々々や秋知る麥日和

逢桑門

いさともに穂麥喰はんくさ枕

甲斐にて

行駒の麥になくさむやとり哉

むきの穂や涙にそめて鳴雲雀

五月十一日武府を出て故郷に赴く人々川崎まて送來て餞別の句を言ふ其かへし

麥の穂をたよりにつかむ別哉

招提寺

若　葉　わか葉して御目の雫拭はゝや

日光山

あら尊若葉々々に日のひかり

須磨

木下闇　須磨寺にふかぬ笛聞く木下闇

雲岸寺

夏木立　きつゝきも庵は破らす夏木立

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

大垣の城主日光参勤させ給ふに扈従する岡田氏か某に寄

茂

篠の露はかまにかけし茂かな

嵐山の藪のしけりやかせの筋

落柿舍

柚の花　柚の花に昔をしのふ料理の間

悼大顛和尚

卯の花　梅戀ひて卯の花拜むなみた哉

其角か母五七日追善

うの花も母なき宿そすさましき

卯の花やくらさ柳の及ひこし

駿河の國に入て

蘆　橘　駿河路や花立はなの茶の匂ひ

二葉軒を訪ひて

藪　椿　藪つはき門はむくらの茂かな

關の住素牛何かし大阪の旅店を訪れ侍りしに藤しろみさかといひけん花は宗祇の昔に匂ひて

藤　實　藤の實は俳諧にせむはなの跡

許六か木曾路に赴く時二句の内

椎　花　椎の花こゝろにも似よ木曾の旅

小督墳にて

筍　浮節や竹の子となる人のはて

竹の子や稚ときの繪のすさび

鰹　又越ん小夜の中山はつかつを

かつを賣いか成人を醉すらん

鎌倉を生て出てけん初かつを

名にしれへる鵜飼と云ものを見侍んと暮かけて誘ひ申されしに人々

秋葉山の木陰に席を設盃をあけて

鮎　又たくひなからの川のあゆ繪

杜　鵑　なけや啼け耳のすうなる杜鵑

不如歸今は俳諧師無き世かな

口すへれ油月夜のはと〻きす

戸の口に宿札名のれはと〻きす

黒燒釜わつて捨けりはと〻きす

暫し間も待やはと〻きす千年

淸く聞ん耳に香炷てはと〻きす

子規正月はうめのはなさかり

岩つゝし染る涙やはと〻きす

はと〻きす啼や黒戸のはま庇

橘やいつの野中のはと〻きす

鉄蓋か峯にのはる二句

須磨の蜑の矢先になくや蜀魂

ほとゝぎす消行く方や島一つ

時鳥なき〳〵飛そいろかはし

裏見の瀧

子規うらみの瀧のうちおもて

みちのく一見の桑門同行二人那須の篠原を尋て殺生石見んと急き侍るほとに雨降出けれは先此所に止り

落來るや高久の宿のほとゝぎす

那須野にて

野を横に馬ひきむけよ不如歸

ふじ一周忌琴風興行

杜宇なく〳〵音やふるきをゝり箱

橘鳥こゑ横たふやみつのうへ

京に居て京なつかしや冥途鳥

嵯峨にて

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

杜鵑まねくか麥のむら尾はな

勸農馬なくや五尺のあやめ草

さし竿畫たる扇に

鳥さしも竿やすてけん郭公

仙臺にて

田やひきや中にも市の不如歸

笈負僧

見へはやな出立〳〵の冥途鳥

あけぼのやまた朔日に不如歸　七十二
木かくれて茶つみも聞や時鳥
烏賊賣のこゑまきらはし子規
うき我を淋しからせに閑千鳥

閑子鳥

行々子　能なしのねふたし我を行々子
四度結ひたる深川の庵立出るとて

老鶯　黄鳥や竹の子藪においをなく
鵜舟も通り過わとに歸るとて

鵜舟　面白うてやかて悲き鵜ふね哉
乘たやと子の聲くらき鵜舟哉

別舊友

鹿袋角　二股にわかれそめけり鹿の角

誠に須磨明石のそゝさかひはゝいわたるわとゝいへりける源氏のありさまも思ひやるにそ今はまほろしの中夢を重ねて人の世の榮花もはかなしや

蝸牛　蝸牛つのふりわけよすま明石
許六か木曾に赴く時二句の中

蠅　うき人の旅にもならへ木曾の蠅
秋の坊を幻住庵にとめて

蚊　我宿は蚊のちいさきと馳走哉

清風亭

蟇　這ひ出よ飼家の下のひきの聲

螢　晝見れは首筋あかきほたる哉
愚にくらく荆をつかむ螢かな　七十三

木曾路の旅おもひたちて大津にとゝまる頃瀬田の螢を見に出て

このはたる田毎の月に競見ん

草の葉を落るよりとふ螢かな

上林三入亭

はたる見や船頭酔ておはつかな

れのか火を木々の螢や覺束な

長貞亭

五　月　海ははれてひへ降野寺五月哉

奥州名収の郡に入中將實方の塚つくにやと尋ね侍れは道より一里半斗り左の方笠島といふ所にありと教ふ降つゝきたる五月雨いとわりなくうち過るに

笠島はいつにさつきのぬかり道

五月三十日富士の思ひ出らるゝに

目にかゝる時や殊更五月富士

五月雨　五月雨の岩檜葉の翠いつ迄そ

さみたれに御物遠や月のかは

さみたれや龍燈あけの番太郎

さみたれやこの笠森を指も草

病中自脉

髭生て我かは青しさつきさめ

五月雨にかくれぬ物や瀬田橋

阿武隈川の水源にて

五月雨は瀧降うつむ水嵩かな

中尊寺にて

さみたれの降殘してや光り堂
五月雨をあつめて早し最上川
日の道や葵かたむくさつき雨

落柿舍

五月雨や色紙へきたる壁の跡
さみたれや蠶わつらふ桑の畑

露川へ申送る

五月雨に鴉の浮巢を見に行ん

五月雨風しきりて落て大井川水出侍りければとゝめられて島田に逗留す如舟如竹などいふ人許に在て二句のうち

五月雨のくも吹き落せ大井川
野に臥ことも樂しきやと主の問けれは

梅雨

降かとや耳にそうなる梅の雨
入梅晴の私し雨やくもちきれ

醫王寺にて

粽

笈も太刀も五月飾れ紙のはり

青さし

ちまき結ふ片手にはさむ額髮
青さしや草餅の穗に出つらむ

菖蒲

あやめはへり軒の鬷の髑髏

留別

菖蒲草たしかに結ん草鞋の緒

俗士にいさなはれて五月四日吉岡求馬を五日はや死すと聞て

花あやめ一夜にかれし求馬かな

蘆野

田植　田一枚うゑて立ちさる柳かな

陸奥の名所は心にれもひとめてまつ關屋跡なつかしきまゝにふる道

にかゝりて今の白川もこへぬ頓て岩瀬郡に至りて乍單齋等躬子の芳

扉と抔かな陽關の出て故人に逢ふなるへし

風流のはしめやれくの田植歌

尾張の舊友に對す

世を旅に代かく小田の行戻り

藤田氏の亭

柴つけし馬のもとりや田植酒

岱水亭

早苗　雨をり〳〵思ふ事なき早苗かな

奥州今の白川に出二句

西か東かまつ早苗にも風の音

早苗にも我いろもろさ日數かな

しのふの郡信夫の里とかや文字摺の名殘とて方二間はかりなる石あり此石は昔女の思ひに石と成りて其面に文字ありとかや山藍谷間に埋て石の面は下さまに成たれはさせる風情も見えす侍れとも流石に昔おはしくてなつかしけれは

早苗とる手元やむかし忍ふ摺

滑風亭

紅の花　行すへは誰肌ふれんへにの花

眉拂をおもかけにして紅の花

發心の時

鉄線花　散はちれ千里一風の鉄せん花

予珊亭

紫陽花　紫陽花や藪を小庭の別さしき
あちさゐや惟子薄きの薄淺黄

百合花　美しきその姫百合や后さね

瞿麥　醉てねんなてして咲る石の上

正成の像　鐵肝石心此人之情
なてしこにかゝる涙や楠の露

河野松波宅にて古き長瓢に瓜の花をわけて下に無絃の琵琶を置て花生より落る雫を撥面に受けたり

瓜の花　瓜の花しつくいかなる忘れ草
花と實と一度に瓜のさかりかな

幻住庵にこもれる頃
夕にも朝にもあらすうりの花

重行亭

茄子　珍しや山を出羽のはつなすひ
島田にて二句のうち
芦はまた青葉なからに茄子汁

巳百亭

藜　やとりせん藜の杖になる日迄

木因亭竹醉日

竹植　降らすとも竹植る日は簑と笠

桑の實　桑の實や花なき蝶のよすて酒

訪隱者

栗の花　世の人の見つけぬ花や軒の栗

道芝に休らひて

樗の花　とんみりと樗や雨の花くもり

合歡花　象潟や雨に西施かねふのはな

李　そもゝ青く竹笠破れて石浮雲

白川に住何某に文を遣はす端に

水鷄　關守の宿を水鷄に問はうもの

大津湖仙亭

この宿は水鷄もしらぬ扉かな

露川かともから作谷まて道送りして俱に隱士山田氏か亭にかり寢す

水鷄啼と人のいへはや佐谷泊

水鳥巢　闇の夜や巢をまとはして鳴衛

六月　六月や峯に雲れくあらしやま

くたれる世にもと云けんことはりなりや杉風か採茶庵にすゝみて

水無月　もきの河豚左り勝水無月の鹽

水無月や鯛はあれともしは鯨

千子か身まかりけるを聞て美濃の國より去來か方へ申つかはし侍り

ける

土用干　なき人の小袖もいまや土用干

暑　蛤の口しめて居るあつさかな

あつさ日を海に入たり最上川

新庄風流亭

氷室　水のおく氷室たつぬる柳かな

出羽月山

雲峰　くもの峯いくつ崩れて月の山

本間主馬か亭にまねかれしに太夫か家名を稱して二句のうち

ひら〳〵とあくる扇や雲の峯

水うみや暑さを惜むくもの峰

風薫　風の香も南にちかしもかみ川

游力亭

漣や風のかをりの相ひやうし

羽黒山にて

ちりかたや雪をかをらす南谷

小倉山院

松杉をはめてや風のかをる音

石川丈山の像

涼

風かをる羽織は襟も繕ろはす

箔押よとちも身のため夕納涼

皿鉢もはのかに闇の宵すゝみ

住ける人の外にかくれて蓮生しける古跡を訪て

瓜つくれ君かあれなと夕納涼

文鱗子出山の像を贈りくれは

南も佛草の臺もすゝしかれ

小夜の中山にて

いのちなりわつかの笠の下涼

松風の落葉か水のれとすゝし

破風口に日影や弱るゆふ納涼

風瀑餞別

わすれすは小夜の中山にて涼め

美濃國十八樓の記あり略を

此あたり目に見やる物皆涼し

清風亭

すゝしさを我宿にしてねまる也

涼しさやはの三日月の羽黒山

袖の浦眺望

あつみ山や吹からかけて夕涼み

汐越や鶴脛ぬれてうみすゝし

象潟のさくらは波にうつもれて還の上こく海士のつりふねとよみ給ひけん古き櫻もいまた蚶滿寺のしりへに殘りて陰波をひたをる夕はれいと涼しけれは

夕晴やさくらにすゝむ波の花

川中の根木によろふ納涼哉

四條の河原納涼とて夕月夜の頃より有明過る頃まて川中に床をならへて夜すから酒のみ物喰ひ遊ふ女は帶の結めいかめしく男は羽折長う着なして法師老人ともにましはり桶屋鍛治屋のてしてまていとさえ顔にのゝしるさまさすかに都の氣色なるへし

川風や薄かき着たるもふ納涼

曲翠亭田家納涼

飯あふくかゝか馳走や夕納涼

雪芝亭

涼しさや直に野松のえたの形

野水新宅

涼しさは指圖に見もる住居哉

東武より上りて人々に對す

東路の毛膚はつかし床すゝみ

野明亭

すゝしさを繪に寫けり嵯峨竹

清水　さゝれ蟹足這ひのぼる清水哉

岐阜にて

城趾や古井の清水まつとはん

那須の温泉明神相殿に八幡宮を遷し奉りて両神一方に拜れ給ふ

湯を結ふちかひも同し石清水

むすふより早齒に響く清水哉

汗　汗水やよし野とまりの笈山伏

光明寺にて

あせの香に衣ふるはん行者堂

晋の淵明を羨む

簞　窓なりにひる寢のたひや簞

盤齋うしろ向の像

世の中をうしろになして山里にそむはて丶もすみそめ

の袖といふに

團扇　團扇もてあふかん人のうしろ向

野明亭

心太　清たきの水汲よせてところてん

ふじの母追善

道明寺　水むけてあとあひ給へ道明寺

本間主馬の亭に招かれしに太夫か家名を稱して二句

蓮　蓮の香に目を通はすや面の鼻
　　枝なくて世にかゝはらぬ蓮哉

晝顔　晝顔に米つき涼むあはれなり

寄香亭

ひるかほの短夜ねふる晝間哉
子供こよ晝顔さきぬ瓜むかん

平田李由か許へ文の音信に

ひる顔に晝寢せうもの床の山

夕顔　夕顔に見とるゝや身も浮りひよん
夕顔の白く夜の後架に紙燭取て
夕かほに干瓢ひいて遊ひけり

水葱　なまくさしこなきか上の鮑の腸

甲斐山中

葎茂る　山賤のねとかひ閉るむくら哉

落梧なにかしのまねきに應して稻葉山の松の下納涼して長途の愁を
なくさむはと

瓜　山かけや身を養はん瓜はたけ

去來か別莊にて

朝露によこれて涼しうりの泥
瓜の皮むいたところや蓮臺野

眞桑瓜　闇の夜と狐下這ふたまくは
初眞桑立にや割ん輪にやせん
柳行李片荷はそゝしはつ眞桑

之道に對して

我に似なふたつに割し眞桑瓜

散松葉　清瀧や波にちりこむあを松葉

蟬　梢よりあたり落けり蟬のから

杉風生夏衣いと淸らかに調して贈りければ

いてや我よき布着たりせみ衣

稻葉山

撞かねもひゝくやう也蟬の聲

立石寺にて

しつかさや岩にしみ込蟬の聲

無常迅速

頓て死けしきも見えず蟬の聲

明石夜泊

夏の月　蛸壺やはかなき夢をなつの月

手を打はこたまに明る夏の月

なつの月御油より出て赤坂や

大津木節亭にて

秋　近　秋ちかきこゝろの寄や四疊半

武隈の松にて

夏　雜　櫻より松はふた木を三月越し

書　音

辨慶はなつもかみこの羽織哉

わかれては笠手に提て夏羽折

甲斐の郡内といふ所に到る途中苦吟

馬はく〳〵我を繪に見る夏野哉

歸庵

夏衣いまた虱をとりつくさす
遠淺やなつの日の出のふな心
楢山や柴してもとるなつの雨
夏山や杉にもふ日のいち里塚
夏來てもの只一つ葉のひとつ哉
月を見ても物足はすや須磨夏
落梧のぬし稚き者を失ひけるを悼て
もろき人にたとへん花も夏野哉

裏見の瀧

しばらくは瀧にこもるや夏の始

那須野光明寺にて

夏山に足駄を拜むかとてかな
なつ山や紙漉く里にて食時分
秣負ふ人をしをりの夏野かな

殺生石

石の香やなつ草赤く露あつし

松島

島々や千々にくたけて夏の海
松しまや夏を衣裳のみつと月

秋鴉亭の佳景に對す

山も庭をうてき入るや夏座敷

尿前山家

蚕虱馬のはりそるまくらもと

高館にて

なつ草や兵どもかゆめのあと

井狩氏水樓

世の夏や湖水にうかふ浪の上

曲翠亭にて

夏の夜や崩れて明し冷しもの

なつのよや衙に明る下馱の音

木白亭

畑うつ音やあらしのさくら麻

清瀧や浪にちりなきなつの月

大井川浪にちりなし夏のつき

再案せられし句の其證と爰に出

郭公ころよこたふや水のうへ

一聲の江に横たふやはと〳〵きす

唐破風の入日やうすき夕納涼

唐破風や日かけかけろふ夕涼

はふ口に日影やよはる夕納涼

水無月はふく病やみの暑さ哉

杜若似たりや似たる水にかけ

五月雨も瀬ふみ尋ぬみなれ川

和歌考證

田中一閑身まかりて後妻の加賀國へ引こし侍りていまはとふ人もな

けれはかの墓所谷中の新はりへはしめてまかり侍りて

とふ人もいまはなつ野の草のはら露はかりこそ友とれくらめ

見れはかつむかしの夢のことくさを思ひしられて袖そ露けき
人の身の今のならひをありし世に知らて過にしひとそ墓なき
のり姫の君身まかりしのちはとなく鈴木主水身まかりけれは
見し夢にもめをかさねてかた糸の心細くもれもはもるかな
みるまゝにあなうつゝなや仇野の露ときえもく夢の世の中
五月十八日は例の講習にてかの處へまかりなき人を思ひ出て
かよひにし人は夏野の草の露その名はかりはきえのこりぬる
いつしかにむかしの人としのはれて言の葉草につもかゝるらむ
のかれすむみのゝを山のあはれさを松のあらしに吹もつたへよ
題しらず
捨ぬまにもてらるゝ身の思ひ出をしらてや人のまとはいふ
おなしく

あみさこを舛にはかりてかふ人はうる人よりもあはれなりけり
はいかい歌
としの夜のふけもくまゝにとしけき都の市のにとしつかなり
よる年の夢はさやかに見えねともまめの音にそれとろかれぬる
骸骨讃
みな人のこれをまことの形そとしからは此身かすくにこく樂
嵯峨日記のうち
元祿四辛未卯月十八日嵯峨に去來の落柿舍に遊はれし時書殘されし
ものゝうちにて
北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る去來途中の吟とて語る
つかみ合ふ子供のたけや麥畑
廿二日朝の間雨降今日は人もなくさひしきまゝにむた書してあ

そふ其詞

喪に居るものは悲しみをあるしとし
酒を飲ものはたのしみを主とし
愁に住するものは愁をあるしとし
徒然に住するものはつれ〳〵を主とす

秋之部

文月　文月や六日も常の夜には似ず

今朝の秋　はりぬきの猫に見え鳧今朝の秋

鳴海眺望

初秋　初秋や海も青田の一とみとり

初秋や疊那からの蚊帳の夜着

來る秋　秋來にけり耳を尋ねて枕の風

あき來ぬと妻乞はしや鹿の皮

夕顔やかいまはるほど秋は來ぬ

殘暑　牛部屋に蚊の聲くらき殘暑哉

粟津の庵にて殘暑の心を

ひや〳〵と壁を踏へて午睡哉

江上の破屋を出るとて

身に入　野晒しを心に風のしむ身かな

寄李下

稲妻　稲つまを手にとる闇の紙燭哉

宿敦賀

わの雲は稲妻をまつたより哉

或智識の曰なま禪大疵の基ひとかやいと有かたくて

いなつまに悟らぬ人の尊さよ

粟津にて

稲つまや湖の面をひらめかを

本間主馬か宅に骸骨ともの笛鼓をかまへて能する所を畫て舞臺の壁にかけたりまことに生前の戯れなとか此遊ひにまことならむやかの

髑髏を枕として終に夢うつつをわかたさるものも只此生前を示さるゝもの也

七夕

いなつまや顔の處かすゝきの穂

稲妻や闇のかたゆく五位の聲

月弓や婿の一藝男たなはた

たなはたのあはぬ心や雨中天

何某の御代官に隨身して四國へ趣く人に

たなはたやはたか硯の俄たひ

七夕や秋をさたむるはしめの夜

名所は體のうち

星合　はし合の中やたへなん龍田川

素堂の母七十餘七としの秋七月七日にことはきするに萬葉の七くさ

をもて題とす是につらなる者七人此結縁にふれて各又七叟の齢にならむ

七株の萩の手本やはしのわき

吊両星

高水にはしも旅猴やいはの上

銀河　水草ものりものかさん天の川

出雲崎にて

荒海や佐渡によこたふ天の川

吉野西行庵

硯洗　硯洗ふ智恵はいてたり苔清水

骸骨の讃

盆會　夕風やはん提灯ものりはなれ

甲戌の秋大津にはへりしをこのかみの許より消息をせられけれは舊里に歸りて盆會を營むとて

墓　恭　家はみな杖に白髪の墓まいり

魂　祭　蓮池や折らて其まゝたま祭り

加賀の國を過る

熊坂かゆかりやいつにたま祭

鳥部野

魂まつりけふも燒場の煙かな

尼壽貞か身まかりけると聞て

數ならぬ身とはれもひそ魂祭

嵐雪の四國にわたる時

二百十日　旅からを二百十日も船したく

丸岡の天龍寺を出る時金澤の北枝と別に望て

置扇　もの書て扇ひささく別れ哉

相撲　角髪や奥を出羽のすまひ取

昔し聞け秩父とのさへ熊取

許六の畫に

勝すまふいつも上手に米の飯

吉野西行庵にて

露　露とく〳〵試に浮世すゝかはや

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松のつゆ

曾良に別るゝとて

けふよりや書付けさん笠の露

二見の浦

硯かとひらふやくはき石の露

一草庵の席上饗應に對して

白つゆの寂しき味を忘るゝな

於君崎

霧　松なれや霧えいやらえいと引程に

崑崙は遠く聞蓬萊方丈は仙の地也まのあたり士峯地を拂て蒼天をれさへ日月の爲に雲門を開くかと向ふ處皆面にして美景千變す詩人も句を盡さを才士文人も言を斷畫工も筆を捨てはしるもし貌姑射能巧の神人ありて其詩をよくせんか其畫もよくせむか

雲きりの暫時百景を盡しけり

霧しくれ不二を見ぬ日そ面白

丸岡の天龍寺を出る時金澤の北枝と別に望て　百六

置扇　もの書て扇ひささく別れ哉

相撲　角髪や奥を出羽のすまひ取

昔し聞け秩父とのさへ艇取

許六の畫に

勝すまふいつも上手に米の飯

吉野西行庵にて

露　露とくくに試に浮世すゝかはや

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松のつも

曾良に別るゝとて

けふよりや書付けさん笠の露

二見の浦

硯かとひらふやくはき石の露

一草庵の席上饗應に對して

白つゝの寂しき味を忘るゝな

於君崎

霧　松なれや霧えいやらえいと引程に

崑崙は遠く聞蓬萊方丈は仙の地也まのあたり士峯地を拂て蒼天をれさへ日月の爲に雲門を開くかと向ふ處皆面にして美景千變す詩人も句を盡さそ才士文人も言を斷畫工も筆を捨てはしるもし貌姑射能巧の神人ありて其詩をよくせんか其畫もよくせむか

雲きりの暫時百景を盡しけり

霧しくれ不二を見ぬ日そ面白　百七

暴風　猪もともに吹かるゝ野分かな
吹とはす石も淺間の野分かな

秋風　蜘何と音をなにとなく秋の風
秋風のやり戸の口やとかり聲

憚捨子

猿を聞くすて子に秋の風如何
義朝のこゝろに似たり秋の風
あきかせや藪も畑も不破の關
身にしみて大根からし秋の風

一笑追慕

墳もうこけ我なく聲は秋の風

途中

赤々と日はつれなくも秋の風

那谷觀音にて

石山のいしより白しあきの風

贈桃天號

桃の木の其葉ちらすな秋の風

伊勢の宇治中村を過る

あき風や伊勢の墓はら猶凄し
秋の風ふくとも青しくりの毬

人の短を云事なかれ已の長を說となかれ

物いへば唇さむしあきのかぜ

暮秋のけしきを

秋風や桐に動て蔦のしも

悼松倉嵐蘭

秋風に折れてかなしき桑の杖

野水か旅行を送る

見送のうしろやさひし秋の風

柳陰軒にて

散柳　散る柳あるしも我もかねを聞

全昌寺にて

庭掃て出るや寺にちるなやき

木槿　花木槿はたか童のかさしかな

馬上の嶮

道はたの木槿は馬にくはれ鳧

桐一葉　よるへをいつ一葉に蟲の旅寐して

嵐雪におくる

さひしさを問ふて呉ぬか桐一葉

當麻寺にて

朝顔　僧朝顔いく死かへるのりの松

朝顔の花に啼もく蚊のよはり

和其角蓼螢句

朝顔に我はめしくふをどこ哉

嵐雪は畫に讃を望みけれは

あさかほは下手に書さへ哀也

人々郊外に送出て三盃を傾侍るに

朝顔やこれも又我ともならす

蘭　有蘭草　菊宜止

敦賀専榮院

門に入れは蘇鐵に蘭の匂ひ哉

悅堂和尙の隱室に招かれて

香を殘す蘭帳らんのやとり哉

茶店にて

蘭の香や蝶の つはさに炷のす

秋海棠　秋海棠西瓜のいろに咲にけり

女郎花　玉川の水におはれそ女郎花

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花

芭蕉　此寺は庭一はいのはせをかな

畫讃

鶏啼やうの聲にはせを破

茅舍の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

荻　荻の聲こやあき風のロうつし

萩　寐たる萩や容顏無禮はなの顏

はき原や一夜はやとせ山の犬

ひとつ家に遊女も寐たり萩と月

觀水亭

ぬれて行人もれかしや雨の萩

種の濱

浪の間や小貝にましる萩の塵

いろの濱

小萩ちれますほの小かひ小杯

書讃

白露をこぼさぬ萩の　り哉

藤堂玄虎子い庭なかは作りしを見て

風色やしとろにうゑし庭の萩

毒海長老我草の戸にして身まかり侍るを葬りて

芒　何事もまねき果たるさゝき哉

角觝草　道はそし角力とり草の花の露

閑人の茅舍を訪て

蔦　蔦うゑて竹四五本のあらし哉

野の宮の鳥居に蔦もなかり鳧

棧や命をからむつたかつら

蔦の葉はむかしめきたる梔哉

鬼灯　鬼灯は實も葉も霜も紅葉かな

高田醤師細川青庵にて

草花　藥園のいつれの花を草まくら

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄哉

中秋中の一日此處に遊て青瓢の題得

瓢　夕顔や秋はいろ〳〵の瓢かな

葱　御廟年を經て忍は何を葱くさ

木曾塚の舊庵に在て敲戸の人々に對す

蕃椒　草の戸と知れや穗蓼に唐辛子

かくさぬに宿は菜汁に唐辛子

大風の翌日も赤し唐からし

青くてもあるへき物を唐辛子

千里か舊里にて

綿　綿弓や琵琶になくさむ竹の奥

友人に逢て

冬瓜　冬瓜や互にかはるはの形り

悼仙風

芋　手向けりもいもは蓮に似るとて

西行谷

蟲　芋洗ふ女西行ならは歌よまん

夜る竊に蟲は月下の栗を穿つ

蓋　盆過て宵やみくらしむしの聲

靜さや繪かくる壁のきり〳〵す

床に來て鼾に入るやきり〳〵す

朝な〳〵手習をゝむきり〳〵す

さびしさを釘にかけたる蟋蟀

猪のとこにも入るやきり〳〵す

寵馬　海士か家は小鰕に交る寵馬哉

蜻蛉　蜻蛉やとりつきかねし草の上

草の扉に住わひて秋風の悲しけなる夕くれ友たちの方へつかわしける

簑虫　みの虫の音を聞に來よ草の庵

田莊酒家

鶉　桐の木に鶉なくなる塀のうち

鷹の目も今やくれぬとなく鶉

田中の法藏寺に遊て

鳴鹿

刈あとや早稲かたくの鳴聲
武藏野や一寸ほどなしかの聲
ひれふりて牡鹿もよるや牡鹿島

奈良にて

ひいと啼尻こゑ悲しよるの鹿
名所は體のうち
八湖や天の橋たてたはねのし

曲翠亭題夜寒

夜寒　乳麵の下たき立るよさむかな

六助六兵衛の二人にはせを庵を訪はれて古郷の安否をきく

秋の暮　いく千里へたつ思ひや秋の暮
雪の旅それらてはなし秋の暮

愚案するに冥途も斯や秋の暮
秋の暮男は泣ぬ者なれはこそ

木因亭

死もせぬ旅寢の果よあきの暮

深川の庵

棹郎の尻こゑ寒しあきのくれ
枯枝に烏のとまりけり秋の暮

雲竹畫像讃　洛の桑門雲竹みつからの像にやあらんあなたの方にかはふりむけたる法師を畫てこれに讃せよと申されけれは君は六十年あまり予は既に五十に近しともに夢中にしてもめのかたちをあらはす是にくはふるに寢言をもつてす

こちらむけ我も淋しき秋の暮

所思

此道や行く人なしにあきの暮
あさのくれ客も亭主の中柱

落水　俱利伽藍や三度起ても落し水

三日月　三日月や朝顔の夕つぼむらん
三日月や早手にさはる草の露

大曾根成就院より歸るさに
何事の見立にも似す三日の月

嵐蘭初七日詣墓
見しやその七日は墓の三日月

下弦　二十日すき出るや名殘の月

いさゝかなる所に旅立て舟の中に一夜をあかし曉の空蓬より頭をさ

し出して
明もくや二十七夜も三日の月

武藏守泰時仁愛を先とし政以来欲先とそとあり
名月の出るや五十一の條
おもく〳〵と名月の夜の茶臼山

敦賀夜泊
名月や北國たよりさためなき
名月はふたつありても瀨田月

兼題
夏かけて名月あつき涼みかな
名月や兒たちならふ堂の椽
名月や鶴脛たかき遠干潟

名月や我を筆架のかけ法師　百二十二

名月やわか家にもとる門徒坊

深　川

名月や門にさし來る潮かしら

伊賀山中にて二句

明月の花かと見えて綿はたけ

名月に麓のきりや田のくもり

名月や池を巡りてよもすから

明月や西にもはしき窓ひとつ

等栽に尋あひて

名月の見所とはんたひねせん

義仲寺にて

今日月　三井寺の門たゝかはや今日月

木を伐てもと口見はや今日月

月見　見るかけやまた片形も宵月夜

雲折々人を休ひる月見かな

坐頭かと人にみられて月見哉

鹿島混本寺

寺に寢てまこと顔なる月見哉

田　家

賤の子や稲もりかけて月を見る

淺水の橋をわたる俗にあさむつと云清少納言の橋はと有一條あさむ

つのと書る處とそ

あさむつや月見の旅の明放れ　百二十三

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先き

古寺觀月

月見する美しきかはもなし

十六夜　十六宵はわつかに闇の始かな

打出の濱

十六夜や海老烹る程の宵の闇

月代佗身代わひ拙きを佗てわふとこたへんとすれと問ふ人もなく猶わひ〳〵て

月

佗てすめ月佗齋の奈良茶うた

月そしるへ此方へいらせ旅の宿

桂男すますなりけりあめの月

影は天か下てるひめか月の顔

實や月間くち千金のとふり町

なかめるや江戸に尙稀な山月

廿日あなりの月かをかに見えて山の根際いとくらきに馬上に鞭をたれく數里いまた鷄明ならす杜牧の早行の殘夢小夜の中山に至て忽驚く

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

神路山

三十日月なし千とせの杉を抱嵐

川舟やよい茶よい酒よい月夜

古將監か古實を語て

月やその鉢の木の日の下面

鹿島にて

月早し梢は雨をもちながら

田家

芋の葉や月待里のやけはたけ

善光寺

月かけや四門四宗も唯一つ

湯の尾

月に名を包み兼てやいもの神

鵜山

義仲の寐さめの山か月かなし

元祿二年つるかの湊に月を見て氣比の神社に詣遊行の上人の古例を聞

月清し遊行のもてるすなの上

濱

月のみか雨に角力もなかり鳧

仲秋の夜つるかに泊りぬあるしの物かたりに此海に鐘の沈みて侍るを國の守の海士を入れて尋ねさせ給へと龍頭下さまに落て引揚へきたよりもなしと聞て

月いつてかねはしつめる海の底

木因亭にて

隱れ家や月と菊とに田三たん

斜嶺亭　戸をひらけは西に山あり伊吹と云花にもよらす雪にもならす只是孤山の德あり

其まゝに月もたのまし伊吹山

伊勢國又玄か宅にとゝめられ侍るころ其妻の男の心にひとしく物と

にまめやかに見へけれは旅の心を安くし侍りぬかの日向守の妻髪を切て席をまうけられし心はせを今更に申出て

月さひよ明智かつまの嘶せむ

悼遠流天宥法印

其靈を羽くろにかへせ法の月

わか宿は四角なかけた窓の月

正秀亭初會

月代やひさに手をれく霜の宿

消息

水あふらなくて寐る夜や窓の月

柴の戸と聞はいやしき名なれとも世にこのもしきものにそありける此歌は東山に住ける僧を尋て西行のよませ給ひよし山家集にのせられたりいかなる住居にやとまつ其坊のなつかしけれは

柴の戸の月や其まゝ阿彌陀坊

旅窓長夜

こゝの度おきても月の七つ哉

柱は杉風枳風か情を削り住居は曾良岱水の物もきを佗猶名月のよそはひには芭蕉五もとを栽たり

芭蕉葉を柱にかけんいはの月

深川の末五本松と云所に舟をさして

川上とこの川下やつきのとも

簑蟲庵にて

今よひ誰よし野の月や十六里

畦山亭題月下送兒

月すむや狐こはかるちこの供　百三十

其柳亭にて

秋もはやはらつく雨に月の形
山寒しこゝろのうこや水の月
駒迎　桟やまつおもひいつ駒むかへ
砧　鍼立や肩につちうつ唐ころも

近江路を通り侍る頃日野山の邊にて胡广といふものに上の衣とられて

剝れたる身には礎のひゝき哉

よし野にて

きぬた打て我にきかせよ坊の妻
聲すみて北斗にひゝく礎かな

猿ひきはさるの小袖を砧かな

醫師明石の像

藥堀　ひら雨を脊中に負ふて柴胡掘

遊女書讃

芙蓉　枝ふりの日に〳〵替る芙蓉哉
きり雨のうちを芙蓉の天氣哉
雁來紅　けいとふや雁の來時なは赤し
蘆　とらへたき聲はかり見る蘆間哉
蜀黍　蜀黍や軒端の荻のとりちかへ
粟　粟稗にまつしくもわらを草の庵

知足の弟金右衛門の新宅を賀す

よき家や雀よろこふ脊戸の粟　百三十一

伊勢の斗從に山家を訪れて

蕎麥　蕎麥はまた花てもてなす山路哉

三日月の地はれほろ也そはの花

初茸　はつたけやまた日數へぬ秋の露

松茸　松茸やかふれたはとは松の形

松茸やしらぬ木の葉のへはり付

茸狩　たけ狩やあふないことに夕時雨

加賀の國に入

早稲　早稲の香やわけ入る右は有磯海

人に米をもらひて

稲刈　世の中はいね刈頃かくさの庵

落穂　いたゝひて落穂拾はん關の前

稲雀　稲すゝめ茶の木畑や逃ところ

渡鳥　目にかゝる雲やしはしの渡鳥

四十雀　老の名の有とも知らて四十雀

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寐かな

鮭　鮭馬のかけ見ん關のわたし舟

山中十景題高瀨漁火

鰍　かゝり火に鰍や浪の下むせむ

紅葉鮒　是もまた水生木やもみちふな

仲秋の月は更科の里姨捨山に慰めかねて猶あはれさの目にもはなれすなから長月十三夜になりぬ

木曾の寢もまた治らぬに后の月

石山に詣ける道

名殘月　橋桁のしのふは月の名殘かな

住吉の市に立て

升の市　升買て分別かはる月見かな

内宮は事をさまりて外宮の遷宮を拜み侍りて

御遷宮　尊さに皆をしあひぬ御さん宮

たよりも文月の玉まつる頃武陵より古里に歸るに二十とせの月日も夢なれや北堂の養草も霜かれて今は其おもかけたになかりしか何ともむかしに立かはりてはらからの鬢しろく眉しはみてつれなきいのちありとのみいひ出るとの葉もなきに兄の守袋をほときて母の白髪をかめよ浦島の子の玉手箱汝の眉もやゝ老たりと年月のおこたりはかたみに泣つゝ

手にとらは消ん涙そあつき秋の霜

重陽

盃の下行くきくやくち木はん

秋を經て蝶もなめるや菊の露

菊

蓮池の主翁また菊と愛すきのふは龍山宴をひらきけふは其酒の餘れるをすゝめて狂吟たはふれとなす猶思ふ明年誰かすこやかならむとを

いさよひのいつれか今朝に殘菊

左柳亭にて

早く咲け九日もちかし宿の菊

草庵の雨

起あかる菊はのかなり水の跡

北海の磯つたひして加州山中の涌湯に沿す里人の曰此所は扶桑三名湯の其一なりとまことに浴る事しは〳〵なれは皮肉うるはひ筋骨に通りて心神もるく偏に顔色とゝむるこゝちす彼桃源も舟を失ひ慈童の菊の枝折もしす

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ

木田亭

隱家や月ときくとに田三たん

如行亭

痩なからわりなき菊の苦かな

さくの露落て拾へはぬかこ哉

田家にやとる

稲扱の姥もめてたしきくの花

堅田何かし木既醫師の兄の亭に招れしにみつから茶をたて酒をもてなされける野菜八珍の中菊花なますいと芳しけれは

蝶も來て酢を吸きくの鱠かな

九月九日乙州か一樽を携來りけれは

草の戸や日暮てくれし菊の酒

見處のあれや野分の後ちの菊

岱水亭にて

影待やきくの香のもる豆腐串

八町堀にて

きくの花咲や石屋のいしの間

大門通りを通るに

琴箱や古もの店の昏戸のきく

園女亭にて

白菊の目に立て見る塵もなし

奈良にて

きくの香や奈良には古き佛達

菊の香や奈良のいく代の男振

暗峠にて

菊の香にくらかり登る節句哉

生玉邊より日を暮らして

菊に出て奈良と浪花は霽月夜

菊花讃

折ふしは酢になる菊の肴かな

元祿辛酉初冬九日素堂菊園遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍ること其節の花はいまためくみもやらす菊花開時即重陽と云る心より且展重陽のためしなきにしもあらねは猶秋菊を詠して人々をすゝめられける事になりぬ

菊の香や庭にきれたる履の底

紅葉　いろつくや豆腐に落て薄紅葉

如水別莊

木の實　籠り居て木の實草の實拾はや

榎の實　榎の實ちる椋鳥の羽音や朝嵐

橡　木曾の橡うき世の人の土產哉

橙　橙や伊勢の白子の店さらし

柿　幻住庵にて李由去來二人に

蒟蒻と柿とうれしきくさの庵

堅田森瀬可休亭

里ふりや柿の木持ぬ家もなし

行秋　行秋や身に引まとふ三布蒲團

其日のあらまし等栽に筆をとらせて寺に殘す路通も此みなとまて出むかひてみのゝ國に伴ふ駒たすけられて大垣の庄に入は曾良も伊勢より來りあひ越人も馬を飛せて如行の家に入集る前川子荆口父子其外したしき人々日夜訪ひて蘇生のものに逢かとく且悅ひ且いたはる旅の物うさもいまた止さるに長月六日になれは伊勢の遷宮拜んと又舟にのりて

蛤のふたみにわかれゆく秋そ

行秋の猶たのもしや青みかん

行秋や手をひろけたる栗の毬

清水の茶店に遊ふ

暮秋　松風の軒をめくりて秋くれぬ

懷老杜

風髭を吹て暮秋歎をるは誰の子ろ

秋雜　見渡せは詠れは見れは須磨の秋

雨の日や世間のあきを堺まち

後家の秋物の哀れをとゝめ鳧

深川草庵を旅立とて

秋十とせ却て江戸をさす故郷

鹿島神前

この松の寶生せし代や神の秋

田家

刈かけし田面の鶴やさとの秋

留別

送られつれくりつ果は木曾の秋
さらてさへ秋よ野寺のひとつ鐘

ある草庵にいはれて

秋涼し手ことに剝けや瓜茄子

小松といふ所にて

しはらしき名や小松吹はき芒

種の濱にて

淋しさや須磨に勝たる濱の秋

幻住庵にて

旅痩や寐冷わつらふあきの山

胡蝶にもならて秋經る菜虫哉

小名木津桐奚興行

秋に添ふて行はや末は小松川

車庸亭にて二句

秋の夜を打崩したるはなし哉

あるし夜遊ふとを好て朝寐せらるゝあり霄寢はいやし朝起はせはし

れもしろき秋の朝寢や亭主振

いく秋のせまりて罌子に隱れ鳧

秋の野や草の中もくかせの音

庵にかけんとて句空か書せける兼好の繪に

秋の色糠味噌壺もなかりけり

何くふて小家はあきの柳かけ

旅懐

芝柏亭

この秋は何て年よる雲にとり
秋ふかき隣は何をするひとぞ

東順傳

老人東順は榎氏にして其祖父江州堅田の農士竹氏氏と稱す榎氏といふものは晋子か母方によるものならん今年七十歳二とせの秋の月をやめる枕の上になかめて花鳥の情露をなしめるおもひかきりの床のほとりまて神みたれす終にさらしなの句をかたみとして大乗妙典の臺にかゝる若かりし時醫を學ひて恒の產とし本多何某の君より俸錢をえて釜魚甑崖の愁すくなしされとも世路をいとひて名聞の衣を破り枝を折て業をすつ既に六十年のはしめなり市店と山居にかへてたのしむ處筆を放たす机をさらぬと十年餘り其筆のすさひ車にこはるゝか如し湖上に生れて東野に終ととる是必大隱朝市の人なるへし

入月の跡はつくえの四隅かな

伊勢紀行跋

ねなし草の花もなく實もみのらすたゝいやしき口にいひのゝしれるたはふれとの世なるを其角一とせ都の空にたひねせしてろ向井氏去來のぬしむつましき契り有て酒のみ茶にかたる折〳〵甘き辛きしふき淡きこゝろの水の淺きより深きをつらへて終に一掬して百川の味ひをしれるなるへしとしの秋いもうとをねて伊勢に詣す白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞てとまり〳〵のあはれなるとゝもかたはし書あらはして戎草の身の案下にれくる一たひ吟して感をおこしふたゝひ誦して感を忘るこたひよみて其無事なることをたはゝ此人此道に

至れり盡せり

西ひかしあはれさ一つ秋の風

銀河序

北陸道に行脚して越後國出雲崎といふ處にとまるかの佐渡か島は海の面十八里滄波を隔て東西三十五里に横をりふしたり峰の嶮難谷のくま〳〵までさすかに手にとるはかりあさやかに見わたさるむへ此島は黄金たはく出てあまねく世のたからとなれはかきりなきめて度島にて侍るを大罪朝敵のたくひ遠流せらるゝによりて只おそろしき名の聞えあるも本意なき事にれもひて窓れしひらきて暫時の旅愁をいたはらんとするほとに日既に海に沈み月はのくらく銀河半天にかゝりて星きら〳〵とさえたる沖の方より波の音しは〳〵はこひてたましひけつるかとく腸たちきれてそゝろにかなしひ來れは草の枕も

さたまらす墨の袂何故とはなくてしはるはかりになん侍る

荒海やさとによこたふ天の川

瓢之銘

一瓢重黛山　自咲稱箕山　莫慣首陽餓　這中飯顆山

顔公のかきはに生るかたみにあらす惠子かつたふ種にしもあらて我にあとつのひさこ有是をたくみにつけて花入る器にせんとそれは大にしてのりにあらすさゝえにつくりて酒をもらんとすれはかたち見るところなしある人曰草庵のいみしき糧入つへきものなりとまことに辭の心あるかなやかて用ひて隱士素翁に乞てこれか名をえさしむ其こと葉は右に記す其句みな山をもておくらるるかゆへに四山とよふ中にも飯顆山は老杜の住る地にして李白かたはふれの句あり素翁李白にかはりて我貧をきよくせんとすかつむなしき時はちりの器とな

れえる時は一壺も千金をいたきて黛山もかろしとせむしかり
物ひとつ瓢はかろきわか世哉

更科姨捨月之辞

ことし姨捨の月見んことしきりなりけれは八月十一日みのゝ國を立道遠く日數すくなけれは夜に出て暮に草枕すれもふにたかはす其夜更科の里に到る山は八はたと云里より一里はかり南に西南に横をりふしてすさましう高くもあらすかとかとしき岩なとも見えす只哀深き山のすかたなりなくさめかねしといひけんもことわりしられてそゝろに悲しさになるもへにか老たる人を捨たらんとおもふにいとゝ涙も落そひけれは

れもかけや老ひとり泣月の友
いさよひもまた更科の郡かな

嵐蘭辞

金革を褥にして敢てたもまさるは士の志なり又質偏ならさるをもて君子のいさはしとも松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし老莊をたましひにかけて風雅を肺肝の間にあそはしむ予とちなむこと十とせあまり九とせにや此三とせはかり間を辞して岩洞に先賢の跡をしたふといへとも老母を擔ひ稚子をはたしとしていまた世波にたたよふされとも榮辱の間にもらす日々風雲に座して今年仲秋中の三日由井金澤の波を枕に月をそふとて鎌倉に杖をひき其歸るさより心地なやましうして終に息たへぬ同しき廿七日の夜のことにや七十年の母にさきたち七歳の稚子におもひを殘もいまたをしむへき齡の五十年にたにたらす公の爲には腹れしきりても悔ましき器のはかなき秋風に吹しはれたる草の袂いかに露けくも口をしくも有へき今はの時の心さ

へしられて悲しきに老母のうらみはらからのなけきしたしきかきうは聞つたへてひとへに親族のわかれにひとし過つらむ月はかりに稚子の手をとりて予か草庵に來たりかれに號えさすへきよしを乞に或五歳のまなこさしうるはしと戒の一字をつみて蘭戒と名つく其悅る色目のあたりをさらずいける時むつましからぬをたになくてそ人はとしのはるゝならひまして父のとく子のとく手のとく足のことく年ころいひなれむつひたる俤の愁の袂にむすほれて枕もうきぬへきはかり也筆をとりてれもひをのへんとすれは才つたなくいはんとすれは胸ふたかりて只れしまつきにかかりて夕の雲にむかふのみ

秋風にをれてかなしき桑の杖

閉關說

色は君子のにくむ處にして佛も五戒のはしめに置くといへともさそ

かに捨かたき情のあやにくにあはれなるかたくもおはかるへし人しれぬくらふの山の梅の下ふしにれもひの外の匂ひに染てしのふの岡の人目のせきも守人なくはいかなるあやまちをかしいてんあまの子の波の枕に袖しぼれて家をうり身を失ふためしもれはかれと老の身の行末をむさふり米錢の中にたましひをくるしめてものゝ情をわきまへさるにははるかにまして つみもるしぬへく人生七十とまれなりとして身のさかりなることはわつかに二十餘年也はしめの老の來れること一夜の夢のことし五十年六十年の齡かたふくよりあさましうくつをれて宵寢かちに朝寢したるぬさめの分別何ことをかむさふる愚なるものは思ふことおはし煩惱增長して一藝すくるゝものは是非のすくるゝものなりこれをもて世のいとなみにあてゝ貪欲の魔界にこゝろを怒し溝洫にれはれて生すことあたはすと南華老仙の只利

害を破却し老若をわすれて閑にならんこと老のたのしみとはいふへけれ人來れは無用の辭あり出ては他の家業をさまたくるもうし尊敬か戸を開て杜五郎か門を鎖んには友なきゝ友とし貧を富として五十年の頑夫みつから書みつから禁戒となす

朝顔や比るは鎖おろす門の垣

成秀か庭上の松をはめる詞

松わり高さ九尺はかり下枝さし出るもの一丈餘枝上たんをかさね其葉森々とこまやか也風琴笛をあやとり雨をよひ波を起す箏に似笛に似皷に似て浪は籟ととく當時牡丹を愛する人奇書を集て他に誇菊を作れる人は輪と咲て人に爭ふ柿木柑類は其實を見て枝葉の形をいはす唯松ひとり霜後に秀四時常盤にして而も其景色をわかつ樂天曰松よく舊氣を吐故に千歳を經て主人目をよろこはしめ心を慰するのみにあらす長生保養の氣齡を知てまつに契るなるへし

元禄四年仲秋日

此處太田神社に詣實盛か甲錦のきれあり住昔源氏に屬せし時義朝公よりたまはらを給ふとかやけにも卒士のものにあらを目庇より吹かへしまて菊から草のほりもの金をちりはめ龍頭に鍬形打たり實盛討死の後木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍よし樋口次郎か使せし事ともまのあたり緣記にみえたり

むさんやなかふとのしたの蜂

大聖寺の城外全昌寺と云寺に泊る猶加賀の地也曾良も前の夜此寺にとまりて

終宵あきかせきくやうらの山

十六日空はれたれはまもはの小貝ひろはんと種の濱に舟を
はしらす海上七里あり天屋何某と云もの被籠小竹筒なとう
まやかにしたゝめさせ僕あまた舟に取のせて追風時の間に
吹着ぬ濱はわつなるあまの小家にて佗しき法華寺有爰に茶
を飲酒をあたためて夕くれのさひしさ感に堪たり

淋しさや須磨に勝たる濱の秋
波の間や小貝にまじる萩の塵

冬之部

小春　月の鏡小春に見るや目の正月

人の許へ始て行て

初時雨　初時はつの字を我しくれかな

はやこなへといふつものむくらのやとはうれたくとも袖をかたしき
てれとまりわれやたひ人

神無月の始ろらさためなきけしき身は風雲の行衛なき心地してとあ
りて

旅人を我名よはれんはつ時雨

伊賀山中にて

初時雨猿も小簑をほしけなる

許六亭にて

時雨

けふはかり人も年よれ初時雨　百五十六

むら時雨てれふれ町の名成可し

行雲や犬の逃はへむらしけれ

火吹竹れとやしくれて小豆飯

戸田樾太夫亭

一しくれ磔やふりて小いし川

道のはとりにて時雨逢ふ

笠もなき我をしくるゝこは何と

桐葉のぬし志わさからされはしはらくとゝまらんと

せしはとに

此海にわらんち捨む笠しくれ

草まくら犬もしくるゝ猿の聲

しくるゝや船の帆綱に取付て

鶏の聲にしくるゝうしやかな

一尾根は時雨る雲か富士の雪

美濃垂井宿矩外かもとろふやこもりして

作り木の庭をいさめる時雨哉

舊里の道すから

時雨るや田のあら株の黒む程

島田驛塚本か家に到る

宿かして名をなのらする時雨哉

馬士は知らししくるゝ大井川

新藁の出そめて早きしくれ哉

山城へ井出の駕かる時雨かな　百五十七

人々をしくれよ宿は寒くとも

笠は長途の雨にほころひ紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり佗つくし

たるわひ人我さへあはれに覺えけるむかし狂歌の才士の國にたより

し事を不圖おもひ出てまうし侍る

木枯　狂句木枯の身は竹齋に似たる哉

竹の畫讃

木からしや頰はれ痛む人の顔

三河の新城の家士菅沼權右衛門宅

京に倦て此こからしやふも住居

鳳來寺に參籠して

木枯に岩ふきとかる杉間かな

初霜　初しもや菊冷そめる腰のわた

我草の戸の初雪見んと餘所にありてもいそき歸ることあまたゝひな

りけるに師走八日はしめて雪降けるをよろこひ

初雪　初ゆきや幸いはにまかりける

奈良大佛再興

初雪やいつ大ふつのはしら立

はつ雪や聖は小僧の笈のいろ

深川大橋半かかりける時に

初雪やかけかゝりたる橋の上

はつゆきや水仙の葉の撓む迄

山中に子供と遊ひて

初雪にうさきの皮の髭つくれ

初氷　芹焼やすそ輪の田井のはつ氷

冬籠　冬籠また寄そはんこのはしら

金屏に松の古ひやふゆこもり

贈洒堂

湖水の磯をはひ出たる田螺一匹芦間の蟹のはさみをれ

それよ牛にも馬にもふまるゝ事なかれ

難波津や田にしのふたも冬籠

櫨七に示す

舊里を去てしはらく田野に身をさすらふ人あり家僕何かし水木のために身をくるしめ心をいましめてその僚奴阿段か功をあらそひ陶侃か故奴をしたふ誠や道は其人をとるへからず物は其かたちにあらす下位に在りても上智の人ありといへり猶右心鐵肝たゆむことなかれあるしも其善をわすへからす

先祝へ梅をてころの冬こもり

千川亭に遊ひて

折々に伊ふきを見てやふゆ籠

爐開　爐ひらきや左官老行鬢のしも

支梁亭にて

口切　口切りに堺の庭そなつかしき

神留守　留守の間にあれたる神の落葉哉

霜月のはしめ武江に到る

神の旅　都出て神も旅寢の日かつかな

夷講　えひす講酢賣に袴着せにけり

ふり賣の雁わはれなり夷子講

御命講　菊鶏頭きりつくしけり御命講

消息

御命講や油のやうなさけ五升

冬枯　ふもかれや世は一色に風の音

冬桔の磯に今朝見るとさか哉

月の澤と聞えける明照寺に旅の心を澄して

散紅葉　尊かる涙やうめてちるもみち

當寺上の平田に地をうつされて既に百年に及ふとかや御堂奉加のこ
とに日竹樹ひそかに土石老たりとまことに木たちものふりて殊勝に
覺え侍りけれは

落葉　百年のけしきを庭のれちは哉

多度の權現を過る

宮人よ我名をしらせおちは川

木葉　三尺の山もあらしの落葉かな

九とせの春秋市中に住わひて居を深川のほとりに移す長安は古來名
利の地空手にして金なきものは行路かたしと云けん人のかしこく覺
侍るはこの身のともしき故にや

草の戸に茶とこの葉かく嵐哉

耕雪亭別墅にて

復花　木枯に匂ひやつけしかへり花

杜國の庵にて

麥蒔　麥生へてよき隱家や畑けむら

蕎麥苅　刈あとの物にまきれぬ蕎麥莖

消息

大根　三十里尾張大根のはなしかな
菊の後大こんの外さらになし

消息

口上に書れとしけりつち大根
大根曳といふことを
鞍つはに小坊主乗るや大根曳
玄虎子旅館にて菜根を喫て終日大夫に談話を
もの丶ふの大根からき話かな
霜の後葎をとひて

枯草　花皆枯てあはれを飜す草の種
熱田にて

枯葱　しのふさへ枯て餅かふ舎り哉
三秋を經て深川の草庵に歸りければ舊友門人日々に群
り來りていかにと問へは答へ侍る

枯尾花　兎も角もならてや霜の枯尾花
桑名古益亭にて

冬牡丹　冬牡丹千鳥よ雪のほと丶きす
熱田の梅人亭塵裏の閑を思ひよせて

水仙　水仙や白き障子のともうつり
三河にて白雪といへる者の子二人へ桃先桃後の名をあ
たへて

その匂ひ桃よりよろし水仙花

寒菊　寒菊や粉ぬかのかかる臼の端

此句は終焉の記枯尾花に出たり病中十月八日の夜の吟なり枯を廻る夢心とゝもせはやと門人とも問はれしよし

枯野　旅に病て夢は枯野をかけ廻る

霜　貧山の釜霜になくこゑさむく

霜枯にさくは辛氣のはな野哉

から〳〵と折ふし凄し竹の霜

土屋四友子を送て鎌倉までまかる

霜を踏て蹴跋ひくまて送けり

櫓田に霜の花見るあしたかな

かりて寢ん案山子の袖や夜半の霜

よすからや竹氷をるけさの霜

逢杜國二句の内

されはこそ荒たき儘の霜の宿

葛の葉の裏見せにけり今朝霜

病中

くすり呑さらても霜の枕かな

深川大橋成就せし時

有かたやいたゝいてふむ橋の霜

時雨をやもとかしかりて松の雪

雪

耕雪亭

雪を待上戸の顔やいなひかり

あられ交る帷子雪は小紋かな

黒森を何といふとも今朝の雪

子におくれたる人のもとにて

しはれ伏や世は逆まの雪の竹
笠の緒や咽喉しむる富子の雪
もきの日や羅紗の羽織に敵鞘
浪の花と雪もや水にかへり花
けさの雪ねふかの園の桑かな
雪の竹笛作るへうふしあらん
もきの朝一人干鮭を嚙得たり
湖水から光出しけり比良の雪

庵にうつりて

深川や根こしのはせを雪圍ひ

抱月亭

市人に出て是うらんもきの笠

杜國亭にて中惡敷人のことなどとりつくろひて

雪とゆき今宵師走の明月か
箱根越す人もあるらしけさの雪

旅人を見る

馬をさへなかむる雪のあした哉

寒山自畫讃

庭掃て雪をわもるゝ箒かな

閑居箴

あら物くさの翁や日ころは人の訪來るもうるさく人にもまみえし人をもまねかしとあまたゝひ心にちかふなれと月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしやものをもいはもひとり酒のみて心にとひてゝろにかたる庵の戸おしあけて雪をなかめ又は盃を取て筆をろ

め筆をそつあら物くるはしの翁や

酒のめはいとゝねら年夜の雪

鳴海驛僕云亭にて

京までははまた半空やゆきの雲

熱田御修覆

磨なはす鏡もきよしゆきの花

信濃地を過る

雪ちるや穂屋の芒の刈り殘し

れのか骨の誰人となん世にさたせられて老の後志賀の里に隠れ侍し

となり今大津松本あたり智月と云老尼の許に尋て斯ることなと語り

出けるついてはもしろけれは

少將の尼のはなしや志賀の雪

湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

大雪や婆々ひとり住む藪の家

日ころにくむ鴉も雪の朝かな

卒堵婆小町讃

あなたふと〳〵みのもたふとし笠もたふとしいつれの人かかたり傳

へいかなる人かうつしとゝめて千載のまはろし今てこに現す其かた

ちある時はたゞしひも又爰にあらんみのもたふとしかさもたふとし

たふとさや雪降ぬ日もみのと笠

草庵士あり

木まくらのあふら拭や夜の雪

ゆき毎に梁たわむすまねかな

竹の讃

たわみては雪待竹のけしき哉

雪見　夜着は重し吳天に雪を見有む

其年のわひ寢を思ひ出て越人にれくる

二人見し雲は今年も降けるか

いささらは雪見に轉ふ處まて

曾良何かしは此あたり近くかりに居をトて朝な夕なに訪つれとはるを我くひ物はとなむ時々柴折くふるたすけとなり茶をにる夜は來り て軒をたゝく性隱閑を好む人にてましはりこかねをたつわる夜雪に訪れて

雪丸け　君火とたけよき物見せむ雪丸け

深川冬夜の感

氷

櫓の鐵浪を打て腸氷る夜や涙

茅舍買水

氷苦く偃鼠か咽をうるはせり

あつさ繩手にて

すくみ行や馬上に氷る影法師

霰

范蠡かちやうなんの心をいへる山家集の題にならふ

一露もこはさぬ菊のこはり哉

瓶われる夜の氷の寢さめかな

自畫自讃

いさ子供はしり歩行玉あられ

石山の石にたはしるあられ哉

いかめしき音やあられの檜笠

膳所の草庵を人々訪ける時

あられせよあしろの氷魚を烹て出さん

與或人

冬知ちぬ宿や籾する音あられ

再芭蕉庵を造いとなみて

いさみ立鷹引すゑるあられ哉

雑水に琵琶きく軒のあられ哉

如行亭にて

琵琶引の夜や三弦のれと霰

池下の茶店にて

寒さ　松葉を焚て手拭あふる寒さ哉

越人と吉田の驛にて

寒けれと二人旅寐や頼母しき

元起和尚より酒を賜ける返しに奉る

水寒う寝入かねたるかもめ哉

綿弓や窓に入日のかけさびき

塩鯛の歯くきもさびし魚の店

仙化か父の追善

袖の色よこれてさびし薄鼠

葱白く洗たてたるさびさかな

みちのく名所のうち猫山

山眠　山は猫眠はいてやゆきのひま

火燵　きり〳〵す忘れ音に鳴巨燵哉

住つかぬ旅のこころや置炬燵

圍爐裏　硯このむ奈良の法師の火燵哉
　　五つ六つ茶の子に並ふゐろり哉

火鉢　深草や是も淺草火はちかな

火桶　あらかねの土より起る火桶哉

古き代としのひて

霜の後なてしこ咲る火桶かな

炭　小野炭や手習ふ人の灰せゝり

白炭やかの浦しまか老のはこ

消しすみに薪わる音か小野の炭

少年を失へる人に對す

埋火　埋火もきもやなみたの烹る音

曲翠旅館

埋火や壁には客のかけはうし

貞德翁の讃

頭巾　稚名やしらぬれきなの丸頭巾

深川八貧の中

雪のいと面白く降ける夕邊同し心なる人の集りて遊ひけるにもと

よりまつしき庵なれは人〳〵薪買に行あれは酒買にもくもあり

米買にもきの袋やなけつきん

頭巾着た顔さしてむやなは簾

紙衣　紙衣にも霜や置かと撫て見し

ためつけて雪見もまかる紙子哉

悼李下か妻

蒲團　被き伏蒲團やさむき夜や凄き

衾　頼むそよ寢酒なき夜の紙衾

落柿舍に鉢敲を待て

鉢敲　長嘯か墳もめくるか鉢たゝき
納豆きる音しはしまてはち敲

霰酒　千代をふる天のてんつる霰酒

乾鮭　からさけや何かしとのは毛唐人

河豚　あら何共なき昨日は過て饅汁
河豚汁や鯛もあるのに無分別

ある家に古き奴僕ありてかたく聖の教を守る
兄弟のくそしにくむや河豚汁

桑名に遊て熟田に到る

遊ひ來ぬ河豚釣かねて七里迄

生海鼠　生なから一つに氷る生海鼠哉

尾張の國熟田にまかりける頃人々師走の海見むと
て舟さし出て

鴨　海暮てかもの聲はのかに白し

龍安寺にて

山鳥よ我もかもねん霜まとひ
髓につゝみてぬくしかもの足

千鳥　一匹のはね馬もなし川ちとり
ねさめは松風の里呼續は
夜明てから笠寺は雪の降日
星崎の闇を見よとやなく千鳥

杜國を訪ける道すから

鷹　鷹一つ見付てうれしいらこ崎

杜國か不幸を伊良子崎に尋て鷹の聲を折節聞て

夢よりもうつゝの鷹を頼母敷

師走　月白き師走は子路か寢覺かな

十二月九日一井亭

旅寢せし宿は師走のゆふ月夜

五百丸へ元服の祝として

春や立また春を見ん此しほを

何にこのしはその市に行く鴉

かくれけり師走の海の鳴辟

寒　から鮭も空也のやせも寒の中

月花の愚にはりたてん寒の入

雁さはく鳥羽の田面や寒の雨

此里をはひといふことはむかし院の御門の譽させ給ふ地なるにより

はう美といふよし里人のかたり侍るをいつれの文に書とゞめたると

もしらす侍れともいとともかしこくれはえはへれ

梅つはき早咲はめんはみの里

訪川亭にて

探　梅　香を探る梅に藏見る軒端かな

打よりて花入さくれ梅つはき

節季候　節季候の來れは風雅も師走哉

素堂亭年忘

節季候をすゝめの笑ふ出立哉

煤　掃　すゝ掃は杉の木の間の嵐かな

行脚の五器一具を難波に殘し置たるを年經て路通かおくりけるを

是やこの煤に染らぬ古　盒　子

そゝ掃はおのか棚つる大工哉

餅　搗　有明も三十日にちかし餅の音

くれ〳〵て餅を餠のわひね哉

餅　花　餅花やかさしにさせる嫁か君

名所八體のうち

衣　配　松島や雪のしら地の衣くはり

古　暦　うか〳〵と年寄人や古こよみ

年　忘　年わすれ三人よりて喧嘩かな

洛の御靈別當景桃丸與行

半日は神をともにや年わすれ

また理火のきへやらぬ臘月末京都を立出て乙州の新宅に春をまちて

人に家かはせて我は年わすれ

魚鳥のこころはしらすとし忘

この忘れなかるゝ年の淀成ん

せつかれて年忘するさけん哉

海ある所に束たる柴をゑかきて

年取物　須磨の浦としとり物や柴一把

年の市　一休か土器かはんとしの市

年の市線香かひに出はやな

年の暮　れりにけり〳〵まてとしの暮

忘れ草菜めしにつまん年の暮
皆拜め二見の注連をとしの暮

枕草紙にあり

年くれぬ笠着て草鞋履なから

乞ふて喰ひ貰ふてくらひさすかにとしのくれけれは
目出度人の數にも入らん老の暮
盗人に逢ふた夜もあり年の暮
蛤の生る甲斐あれとしのくれ
分別の底たゝきけり年のくれ

書讃

行年　行としや汝かおやの小松うり
行年やくもりに見たき梅の花

大年の夜盗人に逢て

冬雑　梅干に通ふうくひすあはれ也
石枯て水しはめるや冬もなし
面白し雪にやならんふゝの雨
さし籠る葎のともや冬菜うり
我爲に日はうらゝなり冬の空

大通院主道圓居士芳名を聞こと久しきまゝにまみえんことを契りしに終に其日をまたす初冬一夜の霜ときえぬけふははや一めくりにあたりぬといふを聞て

其かたち見はや枯木の杖の長

三河の鳳來寺に詣る道のほとりより例の病發りてふもとの宿に一夜を明すとて

夜着ひとつ祈り出して旅寝哉

或庵にて

冬庭や月もいとなるむしの吟

無季

歩行ならは杖突坂を落馬かな

朝よさを唯松島そかたこころ

酒飲居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉

貞徳宗鑑守武の畫讃

三翁は風雅の天工をうけ得て心匠を万歳に傳ふ此影に遊はんもの誰か俳意をあふかさらんや

月花の是やまことの主したち

題花生

此槌のむかし椿かうめの木か

布袋の畫讃

ものはしや袋のなかの月と花

越の新潟にて

海に降雨やこひしきうき身宿

塩にしていさことつてん都鳥

骨柴やかくと見るより蝶の花

かたられぬ湯殿に濡す袂かな

椹や花なきてふの世すてさけ

山賤のおとかひ閉るむくら哉

湯殿

語られぬもとのに破るゝ袂哉

文混合之部

机銘

間なる時は肘をかけて嗜焉吹噓の氣をやしなふ閑なる時は書を紐解て聖意賢才の精神を探り靜なる時は筆を採りて義素の方寸に入たくみなすれしまつき一物三用をたすく高さ八寸れもて二尺両脚にあめつち二の卦を彫にして潛龍牝馬の貞にならふこれをあけて一用とせんや又二用とせんや

應蘭子求

元祿仲冬　芭蕉書

洒落堂記

山は靜にして性をやしなひ水動て情をなくさむ靜動二の間にして住家をえのものあり濱田氏珍夕といへり目に佳境を盡し口に風雅を唱て濁をすまし塵をあらふか故に洒落堂といふ門に戒幡をかけて分別の門内に入ことをゆるさすと書りかの宗鑑か客にをしゆるされ歌に一等くはへておかし且それ簡にして方丈なるもの二間休紹二子の佗をつきてしかも其のりをみす木を植石をならへてかりのたはむれとなすそもくれもゝの浦は勢田唐崎を左右の袖のことくし湖を抱て三上山に向ふ湖は琵琶のかたちに似たれは松のひゝき波としらふひえの山ひらの高ねとなゝめに見せて音羽石山を肩のあたりになんれけり長等の花を髪にかさして鏡山は月とよろふ淡粧濃沫の日々にかはれるかことし心匠の風雲も又これにならうなるへし

四方より花吹入れて鴉の湖

杵折賛

此杵のをれと名付るものは上つかたにてめてさせ玉ひめて度扶桑の最物となれり汝いつれの山より出て何國の里の賤か砧のかたみなるそやむかしは横槌たり今は花入と呼て貴人頭上の具に名をあらたむといへり人また斯のことく高きに居ておこるへからすひきゝに在て

うらむへからすたゝ世の中は横つちなるへし　百九十

此つちのむかし椿か梅の木か

十八樓記

みのゝ國なから川に臨て水樓ありあるしを賀島氏と云いなは山うしろに高く乱山左右にかさなりて近からす遠からす田中の寺は杉の一むらにかくれて岸にそふ民家は竹のかこみのみとりも深し曝布ところ〳〵に引はえて右にわたし舟うかふ里人のゆきかひしげく漁村軒をならへてあみをひき釣をたるゝおのかさま〳〵も只此樓をもてなすに似たりくれかたき夏の日もわするゝはかり入日の影も月にかはりて波にむすはるゝかゝり火のかけも良ちかく高欄のもとに鵜飼するなとまことにめさましき觀なりけらしかの瀟湘の八のなかめ西湖の十の境も涼風一味の中にれもひためたりもし此樓に名をいはんとならは十八樓ともいはまはしき也

此あたり目に見る物皆涼し

卯月の中頃須广の海一見すうしろの山は青葉にうるはしく月いまた朧にて春の名殘も哀なから只此浦のまことは秋を宗とすることにや心にものたらぬけしきあれは

夏はあれと留主のやう也須广の月

題落柿舍　就荒喜似野人居

深對峨峯伴鳥魚　青葉々頭堪學書

枝頭今欠赤虬卵

尋小督墳

強欖怨情出深宥　一輪秋月野村風

昔季僅得求琴韵　何處孤墳竹樹中

黄山谷之感句

杜門覓句陳無已　對客揮毫秦少游

乙州來りて武江の斷幷燭五分の俳諧一卷其中に

半俗の膏藥入はふとところに　百九十一

臼井たふけを馬にかしてき　其角
腰の簑にくるはする月
野分より流人に渡せる小家一
宇都の山女に夜着を借て寐
いつはりみせてもるす堪忍

申の刻はかりより霹靂雹降雲龍空を過る時雹降大なるはから桃のこ
としちひさきは柴栗のことし

廿六日

芽出しより二葉に繁る柿の實　丈草
はたけの塵にかゝるうのはな　芭蕉
蝸牛たのもしけなき角ふりて　去來
人のまつうち釣瓶まつなり　丈草
有明に三度飛脚の行やらん　乙州

廿七日人來らす終日得閑

廿八日夢に杜國か事をいひ出して涕泣して覺る心氣相ましはる時に
夢をなす陰盡て火をもめみ陽おとろへて水を夢みる飛鳥髪をふくむ
時は飛鳥かもめみ帶を敷寐する時は蛇を夢みるといへり睡枕記に槐
安莊周か蝶夢みな其理有て妙をつくせ我夢は聖人君子のもめにあら
ぜ終日妄想散乱の氣夜陰に夢又しかりまことに此ことをもめ見るこ
ろいはもる念夢なれ我に志深く伊陽舊來まてしたひ來りて夜々床を
同しく起ふし行脚の勞をたすけて百日かはと影のことく伴ふ片時も
はなれぜ或時はたはふれ或時は悲しみ其志わか心裏に染てわすゝ
ことなけれはなるへし覺てまた袂をしはる

廿九日　日暮て奥州高館の詩を見る

高館聳天星似冑　衣川通海月如弓
其地の風景聊以不叶古人不經其地時以不叶其景

二日

曾良來りて芳野の花を尋ね熊野に詣侍るよし武江舊友門人の噺かれ